朱子の理氣論（承前）

青木晦藏稿

第三章　現象論

第七節　陰陽の氣

余は以上に於て朱子の所謂太極なる理の實體の如何なるものなるかを考察したり。然るに太極なる理の實體と現象なる氣とはもと相離るべからざるものにして、實體を離れて現象なく、又現象を離れて實體なく、體用一源顯微間なきものなれば、既に實體に就て考察したる吾人は更に此れより現象世界に於ける氣及び理に就て考察せざるべからず。

（一）氣の意義　第一に考察すべきは氣とは形而上なるか形而下なるかの問題なり。今朱子の說く所に據れば、氣とは形而下の器にして理とは形而上の道なりとす。而して此の說は易の繫辭傳に形而上者謂二之道一。形而下者謂二之器一。と云ふに據りたるものにして、器を解して氣と爲したるに由る。故に朱子は

形而上者謂二之道一。形而下者謂二之器一。道是道理。事々物々。皆有二箇道理一。器是形迹。事々物

々。亦皆有二此形迹一。有レ道須レ有レ器。有レ器須レ有レ道。物必有レ則。（朱子語類卷七十五、廿五頁）

問形而上下。如何以レ形言。曰。此言最的當。若以二有形無形一言。便是物與レ理相間斷了。所三以職二截得分明一者。只是上下之間。分二別一得一箇界止一分明。器亦道亦器。有二分別一而不二相離一也。（同上廿四頁）

と云へり。然るに當時陸象山は陰陽を以て道と爲し、形而上のものと爲せるを以て朱子の說に反對して以爲らく、

至レ如下直以二陰陽一爲二形器一。不ㇾ得レ爲レ道。此尤不二敢聞レ命。易之爲レ道。一陰一陽而已。先後始終。動靜晦明。上下進退。往來闔闢。盈虛消長。尊卑貴賤。表裏隱顯。向背順逆。存亡得喪。出入行藏。何適而非二一陰一陽一哉。……說卦曰。昔者聖人之作レ易也。將三以順二性命之理一。是以立二天之道一。曰二陰與レ陽。立二地之道一。曰二柔與レ剛。立二人之道一。曰二仁與レ義。下繫亦曰。易之爲レ書也。廣大悉備。有二天道一焉。有二人道一焉。有二地道一焉。兼二三才一而兩レ之。故六。六者非レ他也。三才之道也。今顧以二陰陽一爲レ非レ道。而直謂二之形器一。其孰爲レ昧二於道氣之分一哉。（陸象山全集卷二、二十一頁）

是に於て朱子は陰陽の形而下の器にして形而上の道にあらざることを辨明して曰く、

若以二陰陽一爲二形而上者一。則形而下者。復是何物。更請見レ敎。若三熹愚見與二其所レ聞。則曰凡有

レ形有レ象者皆器也。其所三以爲二是器一之理者則道也。如レ是則來書所レ謂始終晦明奇偶之屬。皆陰陽所レ爲之器。獨其所三以爲二是器一之理。如二目之明耳之聰父之慈子之孝一乃爲レ道耳。（同上十四頁）

余の見る所を以てすれば、易には一陰一陽之謂レ道と云へるのみにして未だ嘗て陰陽之謂レ道と云はず。又立二天之道一曰二陰與レ陽と云へるは陰の道陽の道を立つるを云へるものにして、陰と陽とを以て直に道と爲すにあらず。且古來の學者皆陰陽を以て氣と爲し一も陰陽を以て道と爲すものあらず。孔穎達の如きも「陰與レ陽雖レ有二兩氣一。恆用二虛無之一一」（周易正義卷七、十一頁）の言あり。以て陸象山の說の誤謬にして朱子の說の正理たるを見るを得べし。而して氣とは如何なるものなるかと云へば陰陽に外ならず。更に陰陽とは何ぞやと問はゞ、陽とは積極的活動的の氣にして陰とは消極的靜止的の氣と云ふの外なかるべし。故に朱子は

蓋陰主レ翕。凡斂聚成就者。陰爲レ之也。陽主レ闢。凡發暢揮散者。陽爲レ之也。（朱子全書卷五十二、廿一頁）

陰氣流行卽爲レ陽。陽氣凝聚爲レ陰。非三直有二二物相對一也。此理甚明。周先生於二太極圖中一已言レ之矣。（朱子文集卷五十、一頁）

と云へり。蓋し氣は今の所謂電子にして陰陽は陰電子陽電子の類なるべし。聞く所に據れば電子は見るを得べらかず聞くを得べからざる微妙なるものにして無形無象に近しと雖も、形而上なるか形而下なるかと云へば、形而下の氣に屬せざるを得ずと。陰陽の氣亦然り。吾人の見聞に入らざる微

妙なる所より云へば、形而上のものゝ如しと雖も、其の實形而下の氣に屬す。是れ朱子が之を以て斷然形而下となせる所以なるべし。而して理あれば氣あり氣あれば理あり理氣はもと分離すべからざる存在なるを以て、理の普徧なるが如く氣も亦普徧にして、宇宙に充滿遍在し時間的にも空間的にも在らざる所なし。故に朱子曰く、

都是陰陽。無物不是陰陽。（朱子語類卷六十五、三頁）

無一物不有陰陽乾坤。至於至微至細草木禽獸。亦有牝牡陰陽。（同上）

天地之間。無往而非陰陽。一動一靜一語一默。皆是陰陽之理。至如搖扇便屬陽。住扇便屬陰。莫不有陰陽之理。繼之者善是陽。成之者性是陰。陰陽只是此陰陽。但言之不同。如二氣迭運。此兩相爲用。不能相無者也。（同上）

一物上又自各有陰陽。如人之男女陰陽也。逐人身上。又各有這血氣。血陰而氣陽也。如晝夜之間。晝陽而夜陰也。而晝陽自午後又屬陰。夜陰自子後又是陽。便是陰陽各生陰陽之象。（同上）

此れに據れば陰陽は到る處に遍在して一物も之れを逃るゝを得べからざるものなり。而して動靜と陰陽との關係を云へば陰陽は體にして動靜は用に屬す。故に朱子は「虛實動靜。是言其用。陰陽剛柔。是言其體。」と云へり。此れに據れば陰陽剛柔の體ありて虛實動靜の用行はるゝものにして、

陰陽を離れて別に動靜なく、又動靜を離れて別に陰陽なしと謂ふを得べし。然らば陰と陽、又動と靜とは二箇の氣なるか一箇の氣なるかと云ふに、朱子の說に據れば之を流行上より見ると對待上より見るとの相異あり。流行上より見れば陰陽動靜は一氣にして相對立するものにあらざれども、對待上より見れば陰陽動靜は二氣にして、陰と陽との分位動と靜との作用截然として亂るべからざるものあり。その言に

陰陽做二一箇一看亦得。做二兩箇一看亦得。做二兩箇一看。是分レ陰分レ陽。兩儀立焉。做二一箇一看。只是一箇消長。（朱子語類卷六十五、一頁）

陰陽有二箇流行底一。有二箇定位底一。一動一靜互爲二其根一。便是流行底。寒暑往來是也。分レ陰分レ陽兩儀立焉。便是定位底。天地上下四方是也。（同上）

陰陽有二相對而言者一。如二東陽西陰南陽北陰一是也。有二錯綜而言者一。如二晝夜寒暑一。一箇橫。一箇直是也。伊川言易變易也。只說二得相對底陰陽流轉一而已。不レ說二錯綜底陰陽交互之理一。須レ兼二此二意一。（同上）

とあるは卽ち是の理を說けるものにして流行とは時間的關係の上より云ひ、對待とは空間的關係の上より云ふ。故に朱子は「一動一靜以レ時言。分レ陰分レ陽以レ位言。」と云へり。而して體用の關係より云へば對待は體にして流行は用に屬す。朱子が

體在二天地後一。用起二天地先一。對待底是體。流行底是用。體靜而用動。（同上卷六十五、一頁）

と云へるもの卽ち是れなり。朱子が此の如く陰陽を流行と對待とに分ちたるは、もと周濂溪の太極說と易とに本づけるものにして、太極說に一動一靜互爲二其根一とあるは是れ陰陽の流行を說き、分二陰分一陽兩儀立焉は是れ陰陽の對待を說けるものなることは前に擧ぐる所の如し。而して易には變易と交易との二義ありて、變易は流行の上より見たるものにして交易は對待の上より見たるものなり。故に朱子も亦易有二兩儀一。一是變易。便是流行底。一是交易。便是對待底。（同上）と云へり。

（二）氣の流行　蓋し氣の流行の方面より云へば陰陽は是れ一氣の活動に過ぎず、その氣を分つて陰陽の二氣と爲すは、只此の一氣の積極的方面を名づけて陽と云ひ、消極的方面を名づけて陰と云ふのみにして、二氣並び存すと謂ふにあらざるなり。是れ朱子が

陰陽只是一氣。陽之退。便是陰之生。不二是陽退了一。又別有二箇陰生一。（朱子語類卷六十五、一頁）

陰陽雖二是兩箇字一。然却只是一氣之消息。一進一退一消一長。進處便是陽。退處便是陰。長處便是陽。消處便是陰。只是這一氣之消長。做二出古今天地間無限事一來。（朱子全書卷四十九、三十頁）

と云へる所以なり。蓋し此の一氣は常に生々として活動して已まざるものにして暫くも靜止するものにあらず。その靜止するが如く見ゆる時と雖も、その中に活動の氣の潛在するありて全然靜止するものにあらず。故に陽はその活動の息處進處長處を云ひ、陰はその活動の退處消處を云ふのみ。

此の如く陰陽は一氣の消息に過ぎざれば、何れよりを陰とし何れよりを陽として截然區別し得らるゝものにあらず。是れ程子が陰陽無レ始。動靜無レ端。非二知レ道者一。孰能識レ之。と云へる所以にして、朱子も亦その思想を繼承して此の理を說けり。

問太極動然後生レ陽。則是以レ動爲レ主。曰。纔動便生レ陽。不二動了而後生一。這箇只得下且從二動上一說起上。其實此之所二以動一。又生二於靜一。上面之靜。又生二於動一。此理只循環生去。動靜無レ端陰陽無レ始。（朱子語類卷九十四、九頁）

問太極解。何以先レ動而後レ靜。先レ用而後レ體。先レ感而後レ寂。曰在二陰陽一言。則用在レ陽。而體在レ靜。然動靜無レ端。陰陽無レ始。不レ可レ分二先後一。今就二起處一言レ之。畢竟動前又是靜。用前又是體。感前又是寂。陽前又是陰。而寂前又是感。靜前又是動。將二何者一爲二先後一。不レ可三只道二今日動便爲レ始。而昨日靜更不レ說也。（同上卷一、一頁）

動靜無レ端。陰陽無レ始。本不レ可下以二先後一言上。然就二中間一截斷言レ之。則亦不レ害三其有二先後一也。觀二周子所レ言太極動而生レ陽。則其未レ動之前。因已嘗靜矣。又言二靜極復動一。則已靜之後。固必有レ動矣。如二春夏秋冬。元亨利貞一。固不レ能レ無二先後一。然不レ冬則何以爲レ春。而不レ貞又何以爲レ元。就レ此看レ之。又自有二先後一也。（朱子文集卷四十九、七頁）

と云へるものは此の理を說けるなり。蓋し陰陽と云ひ動靜と云ふは假りに分別したるのみにして、

實は截然分別し得べきものにあらず。恰も圓き環に就て或る一箇處を起點として先後を分つが如し、是れ人の思考上より先後を分つのみにして環その物には先後の別あるなし。陰陽動靜亦然り。その本質より云へば只一氣あるのみ。故に溯りて云へば陽の前は陰なり而してその陰の前は又陽なり。而して下りて云へば陽の後は陰となり陰の後は又陽となり、無始無終に連續して已まざるものなれば時間上より云へば永遠の流行活動と云はざるべからず。故に朱子は靜者性之所二以立一也。動者命之所二以行一也。然其實則靜亦動之息耳。（太極說）と云へり。此の點より云へば氣なるものは活動的のものにして靜止的のものにあらずと謂ふを得べし。是れ何が故に然るかと云へば、陽中陰あり陰中陽あり、動中靜あり靜中動ありて一動一靜互に其の根となるが故なりと云はざるべからず。朱子此の理を說いて以爲らく、

太極未レ動之前便是陰。陰靜之中。自有二陽之根一。陽動之中。自有二陰之根一。動之所二以必靜一者。根二乎陰一故也。靜之所二以必動一者。根二乎陽一故也。（朱子語類卷九十四、十二頁）

統言陰陽只是兩端。而陰中自有二陰陽一。陽中亦有二陰陽一。乾道成レ男。坤道成レ女。男雖レ屬レ陽。而不レ可レ謂二其無一陰。女雖レ屬レ陰。不レ可レ謂二其無一陽。人身氣屬レ陽。而氣有二陰陽一。血屬レ陰而血有二陰陽一。（同上十一頁）

蓋し朱子の說は一の活動主義と謂ふべきものにして、動を離れて靜なく靜を離れて動なく、動靜相

對的のものゝ如くなれども、其の實活動の連續して永遠無窮に息まざるを意味す。其の靜の如きは絶對に寂靜となるにあらずして活動すべき根を有する靜なることは、その陽中有レ陰。陰中有レ陽。動中有レ靜。靜中有レ動と云ひ、一動一靜互爲二其根一。命之所二以流行而不レ已也。と云へるによりて之を證するを得べし。

（三）氣の對待　上文に述ぶるが如く陰陽は流行の上より見れば一氣の活動なれども、對待の上より見れば二氣對立して存するものなれば、陽は陽にして陰にあらず。又陰は陰にして陽にあらず。その分位一定して亂るべからざるものあり。是れ朱子が陰陽の對待を說いて

動而生レ陽。靜而生レ陰。分レ陰分レ陽。兩儀立焉。分之所二以一定而不レ移也。（太極圖說解）

と云へる所以なり。蓋し二氣對待の上より云へば天地間の現象は一として陰陽の對立動靜の相對にあらざるなし。大體を以て云へば、春夏は動にして陽に屬し、秋冬は靜にして陰に屬し、一日に就ていへば晝は陽にして動き、夜は陰にして靜なり。而して一時一刻に就て之を云ふも時として動靜なきはなく、刻として陰陽なきはなし。是れ現象世界に於ける對待の狀態にして一として相待せざるものなし。朱子此の理を說いて曰く、

某以爲易字有二二義一。有二變易一。有二交易一。先天圖一邊本都是陽。一邊本都是陰。陽中有レ陰。陰中有レ陽。便是陽往交二易陰一。陰來交二易陽一。兩邊各各相對。其實非二此往彼來一。只是其象如レ此。

然聖人當初亦不二恁地思畫一。只是畫二一箇陽一箇陰一。毎箇便生二兩箇一。就二一箇陽上一。又生二一箇陽一箇陰一。就二一箇陰上一。又生二一箇陰一箇陽一。只管恁地去。自レ一爲レ二。二爲レ四。四爲レ八。八爲二十六一。十六爲二三十二一。三十二爲二六十四一。既成二箇物事一。便自然如レ此齊整。皆是天地本然之妙元如レ此。（朱子語類卷六十五、四頁）

是れ伏羲氏の畫したる易に就て云へるものなれども、陰陽動靜の對待を豫想するによりて此の如く陰陽の對待より六十四卦に至る對待を畫するを得たるなり。故に朱子は又、交易是陽交二於陰一。陰交二於陽一。是卦圖上底。如二天地定レ位。山澤通レ氣云云一者是也。（同上）と云へり。然れども是れ天地自然の數によりて作れるものなれば、決して空想にあらざるなり。朱子が易傳に據りて

乾之靜專動直。都是一底意思。他這物事雖レ大。然無二間斷一。只是鴻淪一箇大底物事。故曰二大生一。地則靜翕動闢。便是兩箇物事。其翕也是兩箇物事之聚。其闢也是兩箇物事之開。他這中間極闊。盡容二得那天之氣一。故曰二廣生一。（同上五頁）

と云へるも亦動靜陰陽の流行と對待とに就て說けるものにして上文述ぶる所の理に外ならず。而して體用の上に就て云へば、前に述ぶるが如く對待は體にして流行は用なれば、對待の體ありて流行の用ありと云はざるべからず。更に陰陽動靜に就ていへば陰靜は體にして陽動は用なれば、陰靜の體ありて陽動の用ありと云はざるべからず。故に朱子の說に據れば流行の方面より云へば、もとよ

り一氣の活動流行するものなれば、陰陽始めなく動靜端なくしてその先後體用を分つべきものにあらず。隨つて動靜の何れを以て主とし何れを以て從ともすべからざるなり。然るに對待の方面よりいへば、朱子は陰は體にして陽は用、靜は體にして動は用なりと爲し、陰靜の中に陽動すべきものを收藏するを以て、能く陽動するを得るものと爲せり。故に陰靜は始にして陽動は終なりと云はざるべからず。然れども陽を以て動の端と爲すときは陰は動の終にして、陽を以て始と爲し陰を以て終と爲さざるべからず。是れ朱子に

元亨誠之通。動也。利貞誠之復靜也。元者動之端也。本乎靜。貞者靜之質也。著乎動。一動一靜。循環無窮。而貞也者。萬物之所以成終而成始者也。（朱子文集卷六十七、十七頁）

と云へる所以なり。是れ流行上より見ると對待上より見るとの相異にして矛盾するものにあらず。而して朱子は天地間は一氣の流行にして而も或は陰となり或は陽となりて、動靜屈伸往來消長の作用を爲すを以て能く變化の妙を盡すを得るものと爲せり。故に張橫渠の一故神。兩故化の語に據りて、

一是一箇道理。却有兩端。用處不同、譬如陰陽。陰中有陽。陽中有陰。陽極生陰。陰極生陽。所以神化無窮。（朱子語類卷九十八、七頁）

一故神自注云。兩在故不測。只是這一物。却周行乎事物之間。如所謂陰陽屈伸往來上下。

以至レ行二乎什佰千萬之中一。無レ非二這一箇物事一。所三以謂二兩在故不レ測。兩在故化自注云。推二行乎一一。凡天下事。一不レ能レ化。惟兩而後化。且如二一陰一陽一。始能化二生萬物一。雖二是兩箇一。要レ之亦是推二行乎此一一爾。（同上）

と云へり。一とは一氣の流を意味し、兩とは陰陽の對待を意味す。蓋し一にあらずんば陰陽の動靜消長を見るなく、陰陽の動靜消長にあらずんば一を見ることなし。故に氣なるものは一にして二、二にして一なるを以て能く測るべからざるの妙用を爲すを得。而して此の一氣或は陽となり或は陰となりて互に消長進退するによりて變化の妙を盡すことを得べし。故に一は兩を爲す所以にして兩は一を推行する所以なり。若し一氣の統一作用を缺げは陰陽二氣の作用を見るを得ず、又陰陽二氣の作用を缺けば一氣の統一する道立たずして神明變化の妙用を盡すを得ざるべし。是れ朱子が

一不レ立則兩不レ可二得而見一。兩不レ可レ見則一之道息矣。兩不レ立則一不レ可レ見。一不レ可レ見。則兩之用或幾二乎息一矣。亦此意也。（同上）

と云へる所以にして、要するに一氣の中に陰陽の兩作用あり。陰陽の中に一氣の統一ありて能く變化の妙を盡す所以を說けるなり。

第八節　五行の質

余は朱子の所レ謂氣の如何なるものなるかを明かにしたれば、是れより更に氣の變合によりて成れ

四一

る質の如何なるものなるかを考察せざるべからず。朱子の說に據れば氣は形而下に屬するを以て陰陽の氣の變合によりて成れる質の形而下なること復た論を俟たず。而して氣は形而下に屬すれども殆ど形象の見るべきものなき極めて微妙なるものなれども、質に至りては氣の凝聚して成れるものなるを以て稍形象の見るべきものあるが如し。此の點より云へば質は今日の科學者の所謂原質（又原形質）の如きものなるべし。科學者の說に據れば吾人の肉體は統一あり節制ある各個獨立の生活體たる無數の單位的細胞によりて成立する所の特異的一大細胞の凝聚にして、その細胞各個は無數の原質の凝聚によりて成り、原質は又無數の原子の凝聚によりて成り、原子は又殆ど形象の認むべきものなき微妙なる電子の凝聚によりて成れりと云ふ。是れは獨り人體構造の上に就て云ひ得るのみならず、宇宙の構造そのものも亦此の如きものなるべし。故に今陰陽を以て科學者の所謂陰電子陽電子とすれば、五行の質は所謂原質と同一のものと見るを得べし。

（一）五質の性質　五行の質なるものはもと陰陽の變合によりて成れるものにして、陽の陰に交るを變と云ひ、陰の陽に交るを合と云ふ。且陽は本來發散的なるを以て變と云ひ、陰は本來凝聚的なるを以て合と云へるなり。蓋し陽中陰あり陰中陽ありて、陰陽二氣は相變じ相合ふべき性質を有するを以て、その變合によりて五行の質を生ず。而して五行とは水火木金土の五質の運行を云ふ。是れ有形の水火木金土を云ふにあらずして、かの科學者の水素酸素などゝ云へるが如く有形の水火木

金土を組成すべき原質を云ふ。故に朱子は、

陰陽是氣。五行是質。有二這質一所下以做二得物事一出來上。五行雖二是質一。他又有二五行之氣一。做二這物事一方得。然却是陰陽二氣。截做二這五箇一。不三是陰陽之外別有二五行一。（朱子語類卷一、九頁）

有二太極一。則一動一靜。而兩儀分。有二陰陽一。則一變一合。而五行具。然五行者。質具二于地一。而氣行二于天一者也。（太極圖說解）

陽變陰合。初生二水火一。水火氣也。流動閃爍。其體尚虛。其成レ形猶未レ定。次生二木金一。則確然有二定形一矣。水火初是自生。木金則資二於土一。（朱子語類卷九十四、十三頁）

大抵天地生レ物。先二其輕清一。以及二重濁一。天一生レ水。地二生レ火。二物在二五行中一最輕清。金木復重二於水火一。土又重二於金木一。（同上卷九十四、十八頁）

と云へり。蓋し此の五行の質の中に在りても、水と火とは木金土と同じく二氣の變合により生じたるものなれども、氣に近きものなれば極めて微細なるものにして、木金土は專ら質に屬するを以て水火に比すれば、稍形質に近くして水火の如き微細なるものにあらず。是れ朱子の水火を以て輕清と云ひ木金土を以て重濁と云へる所以なり。然れども朱子の此の考察は有形の水火木金土を基礎として云へるものなることを知らざるべからず。

（甲）生成の次序　陰陽二氣の變合して五行を生ずるや、生成の順序とあり、生成の

順次を以て云へば、天一水を生じ地二火を生じ天三木を生じ地四金を生じ天五土を生ず。更に運行の順序を以て云へば、初めは木の運行に始まり次ぎに火、次ぎに土金水の運行を見るなり。故に朱子は之を說明して

以レ質而語二其生之序一。則曰二水火木金土一。而水木陽也。火金陰也。以レ氣而語二其行之序一。則曰二木火土金水一。而木火陽也。金水陰也。又統而言レ之。則氣陽而質陰也。又錯而言レ之。則動陽而靜陰也。蓋五行之變。至二於不レ可レ窮。然無二適而非二陰陽之道一。至下其所二以爲二陰陽一者上。則又無二適而非二太極之本然一也。夫豈有レ所二虧欠間隔一哉。（太極圖說解）

と云ひ、更に詳細に此の意味を解釋して

夫五行之序。木爲二之始一。水爲二之終一。而土爲二之中一。以二河圖洛書之數一言レ之。則水一木三而土五。皆陽之生數而不レ可レ易者也。故得二以更迭爲レ主。而爲二五行之綱一。以レ德言レ之。則木爲二發生之性一。水爲二貞靜之體一。而土又包育之母也。故木之包二五行一也。以二其流通貫徹而無レ不レ在也。水之包二五行一也。以二其歸レ根反レ本而藏二於此一也。若二夫土一則水火之所レ寄。金木之所レ資。居レ中而應二四方一。一體而載二萬類一者也。故孔子贊二乾之四德一。而以二貞元一擧二其終始一。孟子論二人之四端一。而不下敢以二信者一列中序於其間上。蓋以爲レ無二適而非レ此也。是則宮之統二五聲一。仁之包二五常一。蓋有二並行而不レ悖者一矣。（朱子文集卷七十二、三頁）

と云へり。蓋し陰陽生成の順序は朱子が河圖の數理より云へるものにして、河圖の眞僞如何は古來學者の疑問とせる所なれども、朱子は此の二圖を以て眞實にして疑ふべからざるものと爲せるを以て、此れを根據としてその說を爲せるなり（余は河圖を以て僞物と爲して信ぜず。然れども今姑く朱子の說に從ひて之を解釋す。）その言に曰く、

天地之間。一氣而已。分而爲二。則爲陰陽。而五行造化。萬物始終。無不管於是焉。蓋其所以爲數者。不過一陰一陽。一奇一偶。以兩其五行而已。所謂天者。陽之輕淸。而位乎上者也。所謂地者。陰之重濁。而位乎下者也。陽數奇。故一三五七九。皆屬乎天。所謂天數五也。陰數偶。故二四六八十。皆屬乎地。所謂地數五也。天數地數。各以類相求。所謂五位之相得者然也。天以一生水。而地以六成之。地以二生火。而天以七成之。天以三生木。而地以八成之。地以四生金。而天以九成之。天以五生土。而地以十成之。此又其所謂各有合焉者也。（易學啓蒙通釋卷上、五頁）

朱子の所謂相得とは奇偶の次序を相爲し、其の類の紊るべからざるを云ひ、所謂有合とは奇偶の生成を相爲し、其の類を合して間を容れざるを云ふ。要するに陰陽の氣の相變し相合して生成を爲すや、その次第ありて相紊るべからざるものありて此の現象世界を成す。而して陰中陽あり陽中陰あり、陰は陽に根し陽は陰に根し、交互錯綜して相生ずるものなるを以て、水火の如き水はその質よ

四五

り云へば陰にして其の性より云へば陽なるが故に、朱子は水を以て陽と爲し、又火は質よりいへば陽にして性より云へば陰なるが故に、朱子は火を以て陰と爲せり。其の他木金亦然り。木は質陰にして性陽、金は質陽にして性陰なり。故に朱子は此の理を述べて以爲らく、

水質陰而性本陽。火質陽而性本陰。水外暗而內明。以二其根一於陽一也。火外明而內暗。以二其根一於陰一也。太極圖陽動之中有二黑底一。陰靜之中有二白底一。是也。橫渠言陰陽之精。互藏二其宅一。正此意也。（周子全書卷一、十五頁）

問以レ質而語二其生之序一。此豈就レ圖而指二其序一耶。而水木何以謂二之陽一。火金何以謂二之陰一。曰天一生レ水。地二生レ火。天三生レ木。地四生レ金。一三陽也。二四陰也。問以レ氣而語二其行之序一。豈卽二其運用處一而言レ之耶。而木火何以謂二之陽一。金水何以謂二之陰一。曰此以二四時一而言。春夏爲レ陽。秋冬爲レ陰。（周子全書卷一、十六頁）

（乙）運行の次序　以上述ぶる所は主として宇宙の生成の順序より云へるものなれども、更に運行の順序に就て考察するに、運行は陰陽の條に於て述べたる所の流行と同一にして既に生成したる現象世界の氣質の活動運行を語るものなり。此の點より見れば木は火を生じ火は土を生じ土は金を生じ金は水を生じ水復た木を生じ、互に循環流行して已まざるものにして、周子の所謂五氣順布。四時行焉。及び朱子の所謂到二得運行處一。便水生レ木。木生レ火。火生レ土。土生レ金。金又生レ水。水又

生レ木。循環相生。とは卽ち是れなり。而して之を乾の四德に對すれば木は元に當り火は亨に當り金水は利貞に當る。元が元亨利貞の四德を統一包容するが如く、木は木火金水の四行を包容統一す。且貞の中に元亨利貞の氣の潛在內藏するが如く、水の中に木火金水の四行潛在內藏す。故に五行の運行活動の順序より云へば、木は五行の始めにして水は五行の終に屬すれども、その五行の體用關係より云へば水の中に潛在內藏するの體ありて木となり火となり金水となること、四元氣活動の順序よりいへば元は活動の始めにして亨となり利となり貞となり、體用關係より云へば貞の中に潛在內藏せるもの體となりて元の用となり亨利貞となるが如きものなり。故に木火金水と云ふも元亨利貞と云ふも、氣の上より見れば全く同一のことを云つてその言を異にするのみなり。是れ前の五質の性質總論に於て擧げたる朱子の言によりて明かなり。

以レ德言レ之。木爲二發生之性一。水爲二貞靜之體一。故木之包二五行一也。以二其流通貫徹而無レ不レ在也。水之包二五行一也。以三其歸レ根反レ本而藏二於此一也。故孔子贊二亨之四德一。而以二貞元一擧二其終始一。云云。（見二于前文一）

太極陰陽五行。只將二元亨利貞一看甚好。太極是元亨利貞。都在二上面一。陰陽二ハ。是利貞是陰。元亨是陽。五行二ハ。是元是木。亨是火。利是金。貞是水。（朱子語類卷九十四、十四頁）

と云へるもの卽ち是れなり。又生成より云へば水は陽に屬すれども運行より云へば陰に屬し、又生

成より云へば火は陰に屬すれども運行よりいへば陽に屬し、木は生成上は陰に屬し、運行上は陽に屬し、金は生成上は陽に屬し、運行上は陰に屬することゝなりて同一ならざる所あり。然るに是れ對待上より見ると流行上より見るとの相違にして、宇宙生成の順序は對待上より見。運行の順序は流行上より見たるものなり。對待と流行と相撞突せざるが如く生成と運行とは相矛盾するものにあらず。卽ち一は五行生成の原始より云へるものにして、一は既に生成したる後の現實に就て運行活動の序を云へるものなればなり。而して一氣の運行活動して木火土金水となることは四時の流行と同一にして、四時の流行は畢竟木火土金水の五行の氣候の上に現はれたるものなりと謂ふべし。故に朱子は、

陽變陰合。而生二水火木金土一。陰陽氣也。生二此五行之質一。天地生レ物。五行獨先。地卽是土。土便包二含許多金木之類一。天地之間。何事而非二五行一。五行陰陽。七者滾合。便是生レ物底材料。五行順布。四時行焉。金木水火。分屬二春夏秋冬一。土則寄二旺四季一。唯夏季十八日。土氣爲二最旺一。故能生二秋金一也。以二圖象一考レ之。木生レ火。金生レ水之類。各有二小畫相牽聯一。而火生レ土土生レ金。獨穿二乎土之內一。餘則從レ旁而過。爲レ可レ見矣。（朱子全書卷四十九、四十五頁）

と云へり。此れに據れば朱子が五行を以て四時に配するは、元亨利貞を四時に配すると同一にして朱子は元於レ時爲レ春。亨於レ時爲レ夏。利於レ時爲レ秋。貞於レ時爲レ冬。と云へり。而して五行の土が

五行のすべてに關すること、五常の信の五常のすべてに關するに異ならず。之を要するに朱子は天有二春夏秋冬一。地有二金木水火一。人有二仁義禮智一。皆以二四者一。相二爲用一也。と爲し以て五行の質に關する學說を構成せり。且朱子が氣を分つて一を對待と爲し一を流行と爲して、以て氣の分位と活動との二方面より說きたるが如く、五行を分つて一を質の生成と爲し一を氣の運行と爲し、以て氣質發生運行の次序を立てたるが如き、その學說の組織の秩然として整頓せるを見るを得べし。

（二）人物の氣質　朱子の說に據れば陰陽の二氣は凝聚して五行の質となり、五行の質は更に凝聚して天地萬物の如き形體を有するものとなるべし。而して此の氣と質との凝聚によりて化生と形生との別あり、化生とはその氣の凝聚に男性的のものと女性的のものとの區別あれども、氣を以て化し未だ形體を成さゞるものにして、形生とは氣の凝聚して質となり質の更に凝聚して形體を具ふるものとなるを云ふ。前に述べたる電子凝聚して原子となり。原子凝聚して原質となり、原質凝聚して細胞となり、細胞凝聚して肉體を成すと云へる說と、その說く所精粗の別あれども、その理に至りては一なりと謂ふべし。朱子は此の理を說いて

氣化是當初一箇人無レ種。後自生出來底。形生却是有二此一箇人一。後乃生生不レ窮底。（朱子語類卷九十四、十六頁）

陽而健者成レ男。則父之道也。陰而順者成レ女。則母之遺也。是人物之始以レ氣化而生者也。氣聚成レ形。則形交氣感。遂以レ形化。而人物生々。變化無レ窮矣。（太極圖說解）

太極所レ說。乃生レ物之初。陰陽之精。自凝結成二兩箇一。後來方漸々生二去萬物一皆然。如二牛羊草木一。皆有二牝牡一。一爲レ陽一爲レ陰。萬物有生之初。亦各自有二兩箇一。故曰二五之精。妙合而凝。陰陽二氣。更無二停息一。如二金木水火土一。是五行分了。又三屬レ陽。二屬レ陰。然而各又有二一陰一陽一。只這箇陰陽。更無二休息一。形質屬レ陰。其氣屬レ陽。（朱子語類卷九十四、十六頁）

と云へり。此こに所レ謂男女牝牡とは有形の男女牝牡を云ふにあらずして、男性的及び女性的と云ふに同じく、乾は陽にして坤は陰なる以て之を男女と云へるなり。蓋し自然界に於ける氣にも男性的と女性的とありて、陽は活動的なるを以て之を男性的と爲し、陰は靜止的なるを以て之を女性的と爲すを得べし。而して化生にも男性的と女性的とあれども形質の見るべきものなければ氣に屬す。然るに形生にも男性的と女性的とありて形質の見るべきものあれば質以下に屬するなり。此れに據れば朱子は今日の科學にて所レ謂原質及び細胞を質の一言を以て說けるが如し。是れ朱子の說の未だ精密ならざる所なり。然れども科學の開けざる古代に在り此こまで研究したることは他の學者の及ぶべからざる所なりと謂はざるべからず。

（甲）萬物の一原　蓋し宇宙に存する萬物は人たると物たるとを問はず、又有機物たると無機物たるを問はず、無極の眞二五の精の妙合凝聚して成れるものにして、一として理氣の妙合によらざるものなし。故に人には人の理（卽ち性）あり、禽獸には禽獸の理あり、草木には草木の理あり、瓦石

の如き無生物と雖も亦一箇の理あり。萬物一として一の理を賦與せられざるものなし。是れ前にも述べたるが如く太極は全體の理なると共に部分の理にして、陰陽の中にも存し五行の中にも存し、萬化萬象の中にも存するものなればなり。故に朱子も此理を述べて

天之生レ物也。一物與二一無妄一。（朱子語類卷四、一頁）

天下無二無レ性之物一。蓋有二此物一則有二此性一。無二此物一則無二此性一。（同上）

と云へり。此れに據れば性は人と物との別なく普徧的存在にして、一物として此の性なきものなく佛敎に所謂山川草木國土。悉有二佛性一と同一の理なり。然るに今現象に就て見れば人と物と異なるは勿論、人と人との間にも知愚賢不肖の相異ありて、一も同一のものなきは何に由りて然るか。朱子の說に據れば是れ皆氣質に淸濁昏明通塞正偏ありて然らしむるものにして、理は平等的なるも氣質は差別的なるが故なりとす。故に曰く、

無極二五妙合而凝。凝只是此氣結聚。自然生レ物。若不二如レ此結聚一。亦何由造二化得萬物一出來。無極是理。二五是氣。無極之理便是性。性爲二之主一。而二氣五行。經二緯錯三綜於其間一也。得二其氣之精英一者爲レ人。得二其渣滓一者爲レ物。生氣流行一滾而出。初不レ道下付二其全氣一與レ人。減二下一等一與レ物也。但稟受隨二其所レ得。物固昏塞矣。而昏塞之中。亦有二輕重一。昏塞尤甚者。於二氣之渣滓中一。又復稟二得渣滓之甚者一爾。（同上卷九十四、十五頁）

以二其理一而言レ之。則萬物一原。因無二人物貴賤之殊一。以二其氣一而言レ之。則得二其正且通一者爲レ人。得二其偏且塞一者爲レ物。是以或貴或賤。而不レ能レ齊也。彼賤而爲レ物者。既梏二於偏塞一。而無三以充二其本然之全一矣。惟人之生。乃得二其氣之正且通一者。其性爲二最貴一。其方寸之間。虛靈洞徹。萬理咸備。蓋其所三以異二於禽獸一者正在レ此。而其所丁以可丙爲二堯舜一而參二天地一以贊乙化育甲者。亦不レ外レ焉。（大學或問大全八頁）

然らば仁義禮智の性は人も物も同じく具ふる所にして平等一如なれども、禽獸はその氣の偏且塞を得て其の形體を組織せるを以て、その氣の爲めに塞がれて中に具ふる性を發現するを得ず。而して人はその氣の正且通を得て形體を組織するを以て、その氣の爲めに塞がるゝことなく、能く中に具ふる性を發現することを得べし。その他草木瓦石の類に推すも亦同一の理なり。要するに氣の正偏通塞清濁昏明は有生の初めに定まれるものにして、他より動かし得べきものにあらざれば、偏なるものは正しうすべからず、塞るものは通せしむべからず。故に人は人として存し物は物として萬古易ふべからず。但人は物と異なり中に具ふる性能く發現するを以てその氣質を變化せしむることを得べきのみ。朱子が

或問人物之性一原。何以有レ異。曰人之性論二明暗一。物之性只是偏塞。暗者可レ使二之明一也。偏

塞者不レ可レ使二之通一也。横渠言。凡物莫レ不レ有二是性一。由二通蔽開塞一。所三以有二人物之別一。而卒謂塞者牢不レ可レ開。厚者可二以開一。而開レ之也難。薄者開レ之也易。是也。（朱子語類卷四、一頁）

と云へるは卽ち此の理なり。蓋し萬物の一原に就て觀れば、天が萬物に賦與するの初めは、天命の流行が普徧平等なるを以て、人も物もその稟くる所の性亦普徧平等なるものなり。然るにその稟くる所の二五の氣に正偏通塞淸濁昏明の差あるを以て、人と物との相異を生じ一も同一のものなし。故に朱子の說に論二萬物之一原一。則理同而氣異の論あり。是れ萬物の本原上より論じたるものにしてその理なしと云ふべからず。

（乙）萬物の異體　然るに人物稟くる所の組織如何によりてはその中に存する理の顯現に相異を生せざるを得ずして、大に顯はるゝものと少しく顯はるゝものと、殆ど顯はれざるものと全く顯はれざるものとの差別を生ずべし。朱子此の理を說明し以爲らく、

天命之性。非レ有二偏全一。謂如二日月之光一。若在二露地一。則盡見レ之。若在二蔀屋之下一。有レ所二蔽塞一。有レ見有レ不レ見。昏濁者是氣昏濁了。故自蔽塞如レ在二蔀屋之下一。然在レ人則有二蔽塞可レ通之理一。至二於禽獸一。亦是此性。只被二他形體所レ拘。生得蔽塞之甚。無二可レ通處一。至二於虎狼之仁。豺獺之祭。蜂蟻之義一。却只通二這些子一。譬如二一隙之光一。至二於獼猴一。形狀類レ人。便最靈二於他物一。只不レ會二說話一而已。到二得夷狄一。便在下人與二禽獸一之間上。所二以終難レ改。（朱子語類卷四、三頁）

此れに據れば人と物との間に氣の正偏通塞清濁昏明の相異あれども、現實に就て之を觀れば猶相近きものありて、生を好み死を惡み利に趨き害を避け苦痛を惡み安樂を樂むが如きに至りては、人と物と共通のものなれども、その理の顯現の如きは非常に相異する所あり。而して有機物と無機物との間は全然相異なる所あるを免れず。故に朱子は

氣相近。如下知二寒暖一識二飢飽一。好レ生惡レ死趨レ利避レ害。人與レ物都一般。理不レ同。如二蜂蟻之君臣一。只是他義上。有二一點子明一。虎狼之父子。只他仁上。有二一點子明一。其他更推不レ去。恰似二鏡子一。其他處都暗了。中間只有二一兩點子光一。大凡物事。稟二得一邊一重。便點二了其他底一。如下慈愛底人少二斷制一。斷制之人多中殘忍上。蓋仁多便遮二了義一。義多便遮二了那仁一。（同上卷四、二頁）

と云へり。社會の事實に徵すれば氣相近くして理の同じからざること此の如きものありて、朱子の說く所その眞を得たりと謂ふべし。朱子は更に此の說を繰り返して論ぜり。

生之謂レ性。只是就二氣上一說得。蓋謂人也有二許多知覺運動一。物也有二許多運動一。人物只一般。却不レ知人之所三以異二於物一者。以三其得二正氣一。故具二許多道理一。如レ物則氣昏而理亦昏了。（同上卷五十九、二頁）

天之生レ物。其理固無二差別一。但人物所レ稟。形氣不レ同。故其心有二明暗之殊一。而性有二全不全之異一耳。若二所レ謂仁一。則性中四德之首。非下在二性外一別爲二一物一。而與レ性並行上也。然惟人心至

靈。故能全二此四德一。而發爲二四端一。物則氣偏頗。而心昏蔽。因有レ不レ能レ全矣。然其父子之相親。君臣之相統。間亦有二僅有而不レ昧者一。然欲二其克レ己復レ禮以爲レ仁。美レ善惡レ惡以爲レ義。則有レ所レ不レ能矣。然不レ可レ謂レ無二是性一也。若下生物之無二知覺一者上。則又其形氣偏中之偏者。故理之在二是物一者。亦隨二其形氣一。而自爲二一物之理一。雖レ若レ不二復可レ論二仁義禮智之彷彿一。然亦不レ可レ謂レ無二是性一也。（朱子文集卷五十八、十四頁）

と云へるもの卽ち是れなり。以上は主として有生物に就て萬物の異體より觀察して氣の相近くして理の顯現の相異なる點を說明したり。然るに無生物に至りては性を有せざるが如く見得ざるにあらず。然るに朱子の說く所に據れば謂三物無二此理一不レ得。只是氣昏。一似二都無一了。と云へるが如く瓦石の如き無生物と雖も此の理なきにあらず。只氣の爲めに固く塞がるゝを以て之を發するを得ざるのみ。故にその言に曰く、

問枯槁之物亦有レ理是如何。曰。是他合下有二此理一。故云天下無二性外之物一。因レ行レ街云。階磚便有二階磚之理一。因レ坐云。竹椅便有二竹椅之理一。枯槁之物。謂三之無二生意一則可。謂三之無二生理一則不可。如二朽木一無レ所レ用。止可レ付二之爨レ竈。是無二生意一矣。然燒二甚麼木一。則是麼氣亦各不レ同。這是理元如レ是。（朱子語類卷四、六頁）

天之生レ物。有下有二血氣知覺一者上。人獸是也。有下無二血氣知覺一。而有二生氣一者上。草木是也。有下生

氣已絕。而但有形質臭味者。枯槁是也。是雖其分之殊。而其理則未嘗不同。但以其分之殊。則其理之在是者。不能不異。故人爲最靈。而備五常之性。禽獸則昏而不能備。草木枯槁。則又幷與其知覺者而亡焉。但其所以爲是物之理。則未嘗不具耳。若如所謂纔無生氣便無此理。則是天下乃有無性之物。而理之在天下。乃有空闕不滿之處而可乎。（朱子文集卷五十九、三十八頁）

此れに據れば理なるものは、有生物と無生物とを問はず、すべてに遍在するものにして一物として具有せざることなしと雖も、現實より見れば大なる差異あるものは氣の然らしむる所なりと謂はざるべからず。是に於て朱子に觀萬物之異體。則氣猶相近。理絕不同也。の議論あり。此の議論は前に擧げたる論萬物之一原。則理同而氣異。と相矛盾する所あるが如くなれども實は然らず。卽ち前者は萬物に賦與する初めに就て觀、後者は萬物已に得たるの後に就て觀たるものにして、更に云へば一は本原より見ると、一は現實より見るとの相異なることを知らざるべからず。蓋し本原上より觀れば萬物一原にして、人の有する理も物の有する理も相異なるものにあらず。普徧的なると共に一體的なり。然るに現實上より觀れば、人物の有する理は氣質の爲めに妨げらるゝことなく顯現するものと、氣質の爲めに塞がれて少しく顯現するものと、全く顯現せざるものとありてその顯現に偏全通塞の差異なき能はず。是れ恰も赤き椀に盛れる水の赤くなり、青き椀に盛れる水の

青くなるが如く、氣質の萬殊によりて理も亦隨つて萬殊となるものにして是れ皆氣質の然らしむるものなり。或は此れを以て矛盾するものと爲すものあれども、此れ其の觀察點の異なるによりてその議論の異なるを知らざるものにして、疎漏の見と謂はざるべからず。

第九節　現象の理法

朱子の所〻謂理は之を大別すれば二箇の意義あり。一は本體上(卽ち廣義の理)の理にして、一は現象上の理(卽ち狹義の理)なり。本體上の理は宇宙及び人生一切の根本原理、唯一絕待の本體にして、此の理の中には現象上の理も氣も悉く包涵せられたる廣義のものなり。而して現象上の理とは現象世界に顯現せる相待的の條理法則を意味するものにして、唯一絕對の根本原理にあらず。朱子は前者を稱して所以然の理と云ふ。第四節に於て說けるもの是れなり。而して後者は所〻謂當然の理必然の理、自然の理にして、所以然の理の有する法則なり。故に所以然の理は體にして此の理法(又は法則)は用に屬し、所以然の理は絕待なれども。此の理法(又は法則)は相待なり。體用一源、顯微無間なる以上は體の理と用の理とは相離るべからざるものなれども、體の理と用の理とは區別せざるべからず。今朱子の言に據るに、

如二陰陽五行錯綜不レ失二條緒一。便是理。(朱子語類卷一、三頁)

旣謂二之理一。則便是箇有二條理一底名字。(朱子文集卷四十、三十九頁)

理是有二條理一。有二文路子一。文路子當下從二那裡一去上。自家也從二那裡一去。（朱子語類卷六、二頁）

理如二一把線一相似有二條理一。如二這竹藍子一相似。指二其上行篾一曰。一條恁地去。又別指二一條一曰。一條恁地去。（同上）

とあり。此の他理是有二條辨一。逐二一路子一。以二各有レ條謂二之理一。と云へるもの是れなり。此の條理の意味を有する用的理は。朱子の所謂所當然の理と同一にして、その條理整然として亂れざる所より云へば條理又は條緒とも文路子とも條辨とも云ひ得べく、而してその當にかくすべきの條理ある所より云へば所當然の理と云ふを得べし。故に朱子は「理只是事物當然底道理」と云へり。此の理は所謂氣中の條理にして、所謂所以然の理と云へる根本原理と區別すべく、決して混同すべからず。かの羅整庵が、

理只是氣之理。當下於二氣之轉折處一觀古之。往而來。來而往。便是轉折處也。（困知記續卷三、卅八頁）

千條萬緒。紛紜膠轕。而卒不レ可レ亂。有下莫レ知三其所二以然一而然上。是卽所レ謂理也。（同上卷一、七頁）

と云へるものは此の理に外ならず。朱子も亦氣の活動の條理ありて亂れざる處を以て理と爲したること明かなり。然るに朱子は此の理を以て所以然の理卽ち絶待の理、本體の理と區別して此れを以て所當然の理卽ち相待の理、作用の理と爲したることを知らざるべからず。而して朱子の所謂所當然の理も之を分別すれば、（一）所當然の理、（二）必然の理、（三）自然感應の理と爲すことを得べ

し。然れども此の分析は所當然の理の一理を三方面より觀察したるのみにして、三箇各別の理ありと謂ふにあらざるなり。

（一）所當然の理　今日の科學者は所當然の理なるものは人生界に行はるゝのみにして自然界に行はれず、自然界に行はるゝものは獨り自然の理あるのみと爲せり。然るに朱子はもと宇宙と人生とを以て全然各別のものとせず、宇宙は人生を擴大したるものにして人生は宇宙を縮小したるものと爲せるを以て、所當然の理、必然の理、自然の理は宇宙と人生とに通じて行はるゝこと、所以然の理の宇宙と人生とを通じて同一體なるが如きものと爲せり。故にその言に曰く、

身心性情之德。人倫日用之常。以至天地鬼神之變。鳥獸草木之宜。自其一物之中。莫不有以見其所當然而不容已。與其所以然而不可易者焉（大學或問大全五十九頁）

天道流行。造化發育。凡有聲色貌象。而盈於天地之間者。皆物也。既有此物。則所以爲是物者。莫不各有當然之則而自不容已。是皆得於天之所賦。而非人之所能爲也。（同上五十五頁）

此れに據れば所當然の理は宇宙及び人生に通じて行はるゝ理法なること明かなり。而して朱子が所當然而不容已と云へるを見れば、所當然の理法の中に必然の理法の意味を包含するを知るべし。例へば宇宙に於ける陰陽の動靜消長するには當に動靜消長すべき筈の理法の存するを以て能く動靜

消長するものにして、若し宇宙に當然の理法の存することなくんば動靜消長するものにあらず。而して陰陽の動靜消長するには、必ず動靜消長せねばならぬ理法あるを以て動靜消長するものなりとも謂ひ得べし。故に當然の理法と必然の理法とはもと同一の理法を分別して云へるのみにして、當然の理法の外別に必然の理法あるにあらず。且當然の理法は自然の理法なるものと異なり一定の目的を豫想したるものにして、若し目的を豫想する事なくんば當然の理法は成立せざるなり。蓋し朱子は宇宙を以て自然の理法によりて機械的に運行するものとのみ見ずして、宇宙も人生と同じく目的を有し、常に目的に向つて活動するものと認めたるを以て所當然の理の存在を說けるなり。而して目的を有するものは心を有するものならざるべからず。人の目的に向つて活動するは心を有し、且現在の境に滿足せざるが故なり。故に朱子も天地有二生レ物之心一と云ひ、天地を以て物を生ずるの心ありて常にその目的に向つて發展するものとせり。その言ふ所に據れば左の如し。

蓋萬物生時。此心非レ不レ見也。但天地之心。悉已布散叢雜。無レ非二此理呈露一。倒多了難レ見。若會レ看者能於レ此觀レ之。則所レ見無レ非二天地之心一矣。惟是復時萬物未レ生。且有三一箇天地之心。昭然著見在二這裏一。所二以易レ看也。（朱子語類卷七十一、十一頁）

天地以二生々一爲レ德。自二元亨利貞一。乃生レ物之心也。但其靜而復。乃未レ發之體。動而通焉。則已發之用。一陽來復。其始生甚微。固若レ靜矣。然其實動之機。其勢日長。而萬物莫レ不二資始一。

而此天地流行之初。造化發育之始。天地生々不レ已之心。於レ是而可レ見也。若其靜而未レ發。則此心之體。雖レ無レ所レ不レ在。然却有下未二發見一處上。此程子所下以以二動之端一爲中天地之心上。亦擧レ用以該二其體一爾。（同上卷七十一、十三頁）

此れに據れば易に天地大德謂レ生と云へるが如く、宇宙は生々を以てその目的と爲し、此れに向つて活動發展して息まざるを知るべし。而して此れはもと易の復の卦に就て云へるものにして、坤の卦は陽氣全く盡きて陰氣その極に達し寂然不動全く靜止となれるものなれども、陰中陽あり陽中陰あるは宇宙の原則なり。故にその寂然不動の裡面には已に感じて遂に通ずべきの氣潛在するが故に、復に至りて一陽來復の兆ありて生々として活動せんとするの端を見るべし。而して陽氣盛んなる時は天地の心を見得ざるにあらざるも、陽氣散して宇宙に瀰漫するを以て却て明かに天地生々の心を認め難きものあり。而も一陽來復して少しく動かんとする端に在りては之を認むるに難からず。是れ易に復其見二天地之心一乎と云へる所以なるべし。語類に云ふ、

問天地無レ心。仁便是天地之心。若使二其有レ心。必有二思慮一。有二營爲一。天地曷嘗有二思慮一來。然其所二以四時行萬物生一者。蓋以二其合當レ如レ此便如レ此。不レ待二思維一。此所二以爲一天地之道一。曰。如レ此則易所レ謂復其見二天地之心一。正大而天地之情可レ見。又如何。如レ所レ說。祇說二得他無心處一耳。若果無心。則須下牛生二出馬一。桃樹上發中李花上。他又却自定。程子曰以二主宰一

謂二之帝一。以二性情一謂二之乾一。他這名義自定。心便是他箇主宰處。所三以謂二天地以レ生レ物爲レ心。（朱子語類卷一、四頁）

此れに據れば人に心ありて萬事を宰するが如く、宇宙にも心ありて宇宙間に於ける萬事を主宰するを以て、能く一元の氣運轉流通して暫くも停間なく許多の萬物を生出するを得べし。蓋し天地の心は人之を得てその心と爲し、禽獸草木の如き萬物亦之を得てその心と爲し、一として天地の心を得ざるものなきを見れば、天地に心なしと謂ふべからず。天地既に心あれば必ずその目的ありて一動一靜の間に於て之を見るを得べく、特に動の端に於て之を認むるを得べきなり。然るに此こに謂ふ所は天地生々不レ已之心に就て云へるものなれども、理あれば氣あり、氣あれば理あるは宇宙の理法なれば、天地生々不レ已之心には必ず當に生々すべき筈の理法あり、此れによりて生々として活動發展を遂ぐること言を俟たざる所なり。之を人生問題に移していへば吾人には當に忠孝すべきの理法あり、此れに由りて忠孝の活動を爲すが如きなり。然るに朱子は此の當然の理を說くこと簡單なるを以て、此れ以上說明を加ふるを得ざるなり。

（二）自然の理　宇宙の理法なるものは一面より見れば所當然の理なること上に述ぶるが如しと雖も、一面より見れば自然の理にして此の二者はもと一箇の理の見る所を異するによりて分別したるのみ。而して自然の理は又本體上の自然の理と現象上の自然とに分つて見るを得べし。本體に於け

る自然の理は卽ち所以然の理にして、その根本原理なるより之を所以然の理と云ひ、所以然の理の他に然らしむるものなく自然に然るよりして之を自然の理と云ひ、現象に於ける自然の理は卽ち感應の理にして同じく他に然らしむるものなく自然に然るより云へることは、本體上の自然の理の意義と異ならず。而して感應の理とは自然の理の此れに感ずるあれば彼れに應ずるあり、彼れの應ずるもの又感となりて此れ之に應じ、その條理の秩然として亂れざるものを云ふ。今朱子の言へる所を見るに

天道聖人之所以不息。皆實理之自然。雖欲已之。而不可得。（中庸大全或問百二十頁）

蓋以自然之理言之。則天地之間。惟天理爲至實而無妄。故天理得誠之名。若所謂天之道鬼神之德是也。（同上、百二頁）

と云へるが如きは是れ本體自然の理を說けるものにして、左の言の如きは感應自然の理を說けるものなり。

感應自有箇自然底道理。（朱子語類卷七十二、二頁）

屈則感伸。伸則感屈。自然之理也。今以鼻息觀之。出則必入。出感入也。入則必出。入感出也。故曰感則有應。應則復爲感。所感復有應。屈伸非感應而何。（同上卷七十二、三頁）

感應二字有二義。以感對應而言。彼感而此應。專於感而言。則感又兼應意。如感恩感

レ德之類一。（同上卷九十五、廿五頁）

此れに據れば感應の理なるものは今日の所謂因果の理法と同一にして、宇宙人生を通じて行はるゝ法則なり。蓋し感とは事來りて我を感ぜしむるを云ひ、應とは我他の感を受けて之に應ずるを云ふ。而して感應の理はもと循環して窮りなきものなれば、彼れより來りて我を感ぜしむれば我之に應じその應は又彼れの感となりて彼れ之に應じ、一感一應循環して已まざること、因は果を生じ果又因となりて果を生じ循環窮りなきと同一なり。故に感應と因果とはその名を異にするのみにして、もと異なるものにあらず。朱子の說に據れば感應の理には內感と外感との別あり。更に云へば主觀的感應と客觀的感應との二法あるなり。その言に

問感只是內感。曰物因有二自レ內感者一。然亦不二專是內感一。因有二自レ外感者一。所レ謂內感。如二一動一靜一往一來一。此只是一物。先後自相感。如二人語極須レ默。默極須レ語。此便是內感。若有レ人自レ外來喚二自家一。只得レ喚做二外感一。感二於內一者自是內。感二於外一者自是外。如レ此看方周徧平正。只做二內感一便偏頗了。（朱子語類卷九十五、十五頁）

と云へるもの卽ち是れなり。此の感應自然の理は宇宙及び人生に共通するものにして、かの水が暘に遇ひて水蒸氣となりて升り雲となり、雲が冷氣に遇ひ雨となりて雪となりて降るが如きも、感應自然の理にして、吾人が赤子の井に入らんとするを見て自然に怵惕惻隱の情を起し來るが如きも亦

感應自然の理なれば宇宙と人生との間に區別あることなし。故に朱子は、

凡在天地間。無非感應之理。造化與人事。皆是。且如雨暘。雨不成只管雨。便感得箇暘出來。暘不成只管暘。暘已是應處。又感得雨來。是感則必有應。所應復爲感。寒暑晝夜。無非此理。如人夜睡。不成只管睡。至曉須着起來。一日運動。向晦亦須當息。凡一死一生。一出一入。一往一來。一語一默皆是。古今天下。一盛必有一衰。（朱子語類卷七十二、三頁）

と云へり。而して朱子は更に感が應となり、應が又感となり、感應の理の無窮に連續して已まざるの理を說いて左の如く云へり。

明道言。天地之間。只有一箇感應而已。蓋陰陽之變化。萬物之生成。情僞之相通。事爲之終始。一爲感則一爲應。循環相代。所以不已也。（朱子語類卷九十五、拾五頁）

春秋冬夏。只是一箇感應。所應復爲感。所感復爲應也。春夏是一箇大感。秋冬則必應之。而秋冬又爲春夏之感。以細言之。則春爲夏之感。夏則應春。而又爲秋之感。秋爲冬之感。冬則應秋。而又爲春之感。所以不窮也。尺蠖不屈。則不以伸。龍蛇不蟄。則不以藏身。此卽屈伸往來感應必然之理。（同上卷七十二、六頁）

朱子が「此卽屈伸往感應必然之理」と云へる所に據れば、人生に在りては自然の理と必然の理とは少しく趣を異にする所あるが如しと雖も、宇宙に在りては殆ど異なる所なきに似たり。卽ち必然の

理とは必ず此くならざるを得ざる所ありて然るものなれば、その裏面には自然に然るべくして然るの意味あり。而して感應自然の理も、感あれば必ず應じ應あれば必ず感ずべきの理ありて然るものなれば、必然の理と自然の理とはもと同一の理を分つて二と爲すのみにして相異なる所なきなり。蓋し此の理は現象世界一般に通ずる法則にして、現象世界の事物は一として此の理法より逃れ得るものあるなし。かの陰陽の氣の變化流行するが如きも、五行の質の變化流行するが如きも亦此の自然理法による。卽ち陰陽の一動一靜するや靜が感となりて動の應を生じ、動の應が感となりて靜の應を生じ變化窮りなきが如きも是皆感應自然の理に外ならざるなり。故に朱子は、

器之問程子說感通之理。曰如晝而夜。夜而後晝。循環不窮。所謂一動一靜互爲其根。皆是感通之理。（同上卷七十二、四頁）

と云へり。所當然の理より見れば宇宙には一の心あり目的ありて活動するが如しと雖も、自然必然の理より見れば宇宙には心なく目的なく只自然必然の理法のみによりて運行するが如し。故に朱子語類に左の言あり。

問程子謂天地無心而成化。聖人有心而無爲。曰。這是說天地無心處。是如四時行百物生。天地何所容心。至聖人則順理而已。復何爲哉。明道云天地之常。以其心普萬物而無心。聖人之常。以其情順萬事而無情。說得最好。問普萬物。莫是以心周遍而無私否。

曰天地以此心普及萬物。人得之遂爲人之心。物得之遂爲物之心。草木禽獸接着遂爲草木禽獸之心。只是一箇天地之心爾。今須要知得他有心處。又要見得他無心處。只恁定說不得。（同上卷一、四一頁）

此の說に據れば天地の心は卽ち人に與へられて人の心となり、禽獸草木に與へられて草木禽獸の心となれるものなれば、人類及び禽獸草木に心あるを見て天地にも心あるを知り得べし。然れども四時行ははれ百物生ずる處を見れば天地は無心にして自然の理の行はるゝを見るのみ。蓋し有心と云ふも無心と云ふも吾人の心を基準として類推して認識したるものにして、天地に心ありと云ふももとより人の思慮營爲する自由意志を有するものとは同一視すべからざる所あるべし。故に

問。天地之心亦靈否。還只漠然無爲。曰天地之心。不可道吾不靈。但不如人恁地思慮。伊川曰。天地無心而成化。聖人有心而無爲。（同上、三頁）

の言あり。之を要するに有心と云ふも無心と云ふもそのよる所の理法如何によりて之を見るのみにして、理法を離れては有心もなく無心もなし。是れ人の自由意思によりて選擇決定して之を實現するは有心に屬すれども、既に理想の境に達すれば自由意思の作用によらずして自然に顯はれ來りて無心となるが如きものと謂ふを得べし。語類に

問天地之心。天地之理。理是道理。心是主宰底意否。曰心固是主宰底意。然所謂主宰者卽是

理也。不下是心外別有二箇理一。理外別有中箇心上。（同上）

と云へるは此の理を述べたるものにして、天地心ありと云ふも所當然の理を外にして心ありと謂ふに非らず、天地心なしと云ふも自然必然の理を外にして謂ふに非らず。故に所當然の理の存する所より見れば天地心あるが如く、自然必然の理の行はるゝ所より見れば天地心なきが如く認めらるゝものにして、その根柢に在りては所當然の理も自然必然の理も一體を成し矛盾するものにあらずと謂ふべし。隨つて有心と云ふも無心と云ふもその見る所によりて異なるのみにして、その實は一體なりと謂はざるべからず。

第十節　鬼神の理

鬼神に關する說は古代より存すれども、そは姑く之を措き孔子に就て之を考察するに、孔子は宇宙に一の主宰的精神機能卽ち宇宙神の存在するを信ぜられたるが如し。かの敬二鬼神一而遠レ之。と云へるが如き、子路が鬼神に事ふるを問ふに答へて未レ能レ事レ人。焉能事レ鬼と云へるが如き、殊に中庸に引ける

子曰鬼神之爲レ德。其盛矣乎。視レ之而弗レ見。聽レ之而弗レ聞。體レ物而不レ可レ遺。使下天下之人。齊明盛服。以承二祭祀一。洋々乎如レ在二其上一。如レ在二其左右一。（中庸第十六章）

と云へるが如きはその然るを思はしむるものあり。而して此ここに所レ謂鬼神とは、天地山川の鬼神及

び人鬼を指したるものにして、或は單に天神を指して鬼神と云ひ、或は地祇人鬼のみを指して鬼神と云ふことありと雖も、孔子が宇宙に此の如き神靈の存在するを信ぜられたることは疑を容れず。此れもと宇宙の實在を人格化して人間以上の精神的靈妙なる機能を有するものと認めたるものにして、宗教的信念の發露したるものと謂ふべし。然るに易傳に於ては孔子は之を哲學的に考察して鬼神を以て陰陽の氣の靈妙測り知るべからず思ひ議るべからざるものと爲せり。その言に曰く。

陰陽不レ測之謂レ神。（周易繫辭上傳）

凡天地之數。五十有五。此所下以成二變化一而行中鬼神上也。（同上）

原レ始反レ終。故知二死生之說一。精氣成レ物。游魂爲レ變。是故知二鬼神之情狀一。（同上）

氣也者神之盛也。魄也者鬼之盛也。合二鬼與レ神教之至也。（禮記祭義篇）

前の二條は宇宙の鬼神を云ひ、後の二條は人の鬼神を云ふ。此れ等の思想は宋儒の鬼神の思想の根柢を爲したるものにして、程伊川が

以二功用一言レ之。謂二之鬼神一。以二妙用一言レ之謂レ神。（二程全書卷廿四、十五頁）

鬼神天地之功用。而造化之迹也。（中庸章句第十六章）

と云へるが如きは孔子の易傳に本づきて說明したるものなり。而して張橫渠も亦程伊川と同じく易傳の思想を根據として、

鬼神者二氣之良能也。神者太虛妙應之目。凡天地法象。皆神化之糟粕爾。（正蒙釋卷一、十一頁）

物之初生。氣日至而滋息。物生既盈。氣日反而游散。至之謂レ神。以二其申一也。反之爲レ鬼。以二其歸一也。（同上卷二、一頁）

と云へり。此れ等の諸說は朱子に於ける鬼神論の根據となれるものにして、此こにも朱子が孔子以來の諸說を集めて之を大成したる所あるを知り得べし。

（一）鬼神の本質　孔子以來の思想を根據とする朱子は鬼神の定義に就て、張程二子の定義の足らざる所を補ひ之を解釋して左の如く云へり。

以二二氣一言。則鬼者陰之靈也。神者陽之靈也。以二一氣一言。則至而伸者爲レ神。反而歸者爲レ鬼。其實一物而已。（中庸章句第十六章）

此の定義は朱子の哲學的考察より出でたるものにして、鬼神の本質の如何なるものなるかを明かにするには哲學的考察に本づかざるべからず。然るに鬼神を以て陰陽の靈妙なるものと爲す所に據れば此の意味より宗教的信念も出で來るを見るべし。而して此の說は程子が鬼神を以て一氣の妙用と爲したると張子が鬼神を以て、二氣の靈的良能也と爲したるとを根據としたるものにして、鬼神の定義としては最も完備したるものと謂はざるべからず。又朱子は鬼神を分つて二と爲し、一は宇宙上より鬼神を說き、一は人生上より鬼神を說きたれども、此の定義はもと宇宙的鬼神を說けるも

のなること論を俟たず。然れども人生的鬼神はもと宇宙的鬼神に外ならざるものなれば、人生的鬼神の意義をも含めるものとも見るを得べきなり。此の定義に據れば朱子は陰陽を解するに流行と對待との二方面よりしたるが如く、鬼神を解するにも流行對待の二方面よりしたるを見るべし。卽ち鬼神を以て陰及び陽の二氣の神靈なるものと爲したるは、對待の方面より見たるものにして、又鬼神を以て一氣の消長屈伸往來の靈妙なる作用なりと爲したるは、流行の方面より見たるものと謂ふを得べし。故に陳櫟の如きも「二氣以二陰陽之對待者一言。一氣以二陰陽之流行者一言。」（中庸大全所引）と云へり。蓋し陰陽と鬼神とはもと分離するを得べからざるものなれば、共に此の二方面より觀察するを便利と爲すなり。

今對待の方面より見れば陰と陽とは二氣の存在にして、陽は氣の積極的活動的を云ひ、陰は氣の消極的靜止的を云ふが如く、神は陽氣の神靈的を云ひ鬼は陰氣の靈妙的を云ふものにして、神は神にして鬼にあらず鬼は鬼にして神にあらず、その間截然として分別せざるべからざるものあり。故に朱子は此の理を述べて、

陽魂爲レ神。陰魄爲レ鬼。鬼陰之靈。神陽之靈。此以二二氣一言也。（朱子語類卷六十三、廿九頁）

鬼神是天地間造化。只是二氣屈伸往來。神是陽。鬼是陰。往者屈。來者伸。便有二箇迹恁地一。（同上、三十二頁）

以二二氣一言。則鬼者陰之靈也。神者陽之靈也。二氣謂二陰陽對峙各有レ所レ屬。如二氣之呼吸者爲レ魂。魂卽神也。而屬二乎陰一。耳目鼻口之類爲レ魄。魄卽鬼也。而屬二乎陽一。（同上、廿九頁）

と云へり。故に朱子の說に據れば對待上より見るときは鬼と神との二者の間に分別あるを知り得べし。然るに陰陽を流行的方面より見れば、陰と云ひ陽と云ふも、是れ一氣の活動的積極的なると、靜止的消極的なるとによりて區別したるのみにして、實は一氣の消長屈伸に過ぎざるが如く、鬼と云ひ神と云へば二物の存在するが如く見ゆれども、實は一の神靈的妙用の活動的積極的なると靜止的消極的なるとによりて區別したるのみにして、鬼と神との二物の存在するにあらず。蓋し本來一箇のものを分つて二となすはもと考察上の假定に過ぎざるなり。是れ朱子が、

問二鬼神造化迹一。曰。如二日月星辰風雷一。皆造化之迹。天地之間。只是此一氣耳。來者爲レ神。往者爲レ鬼。譬如二一身一。生者爲レ神。死者爲レ鬼。皆一氣耳。（同上、廿八頁）

以二一氣一言。則至而伸者爲レ神。反而歸者爲レ鬼。一氣卽陰陽運行之氣。至則皆至。去則皆去之謂也。（同上、廿九頁）

陽魂爲レ神。陰魄爲レ鬼。鬼陰之靈。神陽之靈。此以二二氣一言也。然二氣之分。實一氣之運。故凡氣之來而方伸者爲レ神。氣之往而既屈者爲レ鬼。陽主レ伸。陰主レ屈。此以二一氣一言也。故以二二氣一言。則陰爲レ鬼陽爲レ神。以二一氣一言。則方伸之氣。亦有レ伸有レ屈。其方伸者神之神。其既

屈者神之鬼。既屈之氣。亦有レ屈有レ神。其既屈者鬼之鬼。其來格者鬼之神。天地人物皆然。不レ離二此氣之往來屈伸合散一而已。此所レ謂可二錯綜言一者也。（同上、廿九頁）

と云へる所以なり。朱子が流行上より見て、活動的積極的神の中に神あり鬼あり、靜止的消極的鬼の中にも鬼あり神ありと爲すものは、陰陽を流行上より見て陽中陰陽あり陰中陰陽ありて互にその根を爲すと云へると同一の考察より出でたるものにして、その相錯綜せる所に妙用を見るを得べきなり。朱子は此の如く對待と流行とに分つと雖も、此の二者は分離すべからざるものにして、對待卽ち流行と云ふを得べし。故に之を分てば一を鬼となし一を神となすを得べけれども、之を合すれば鬼は卽ち神、神は卽ち鬼にしてもと同一體のものを、その功用の現はれたる所によりて假に分析したるに過ぎざるのみ。

然るに陰陽と鬼神とはもと分離すべからざるものにして、陰陽を離れて鬼神なく鬼神を離れて陰陽なかるべきも、陰陽卽ち鬼神なりとは謂ふべからずして、その間に多少の區別なかるべからず。蓋し陰陽は宇宙間に於ける活動流行する氣その物を指し、鬼神は陰陽の氣の靈妙不可測なる處を指したるものなり。是れ程子が鬼神天地之功用と云ひ張子が鬼神者二氣之良能也と云へる所以にして、陰陽を以て直に鬼神と爲すべからざるの理も亦此こに在り。朱子亦陰陽と鬼神との相違する所を說いて、

七三

鬼神者二氣之良能。是說往來屈伸。乃理之自然。非有安排布置。故曰良能。二氣則陰陽。良能是其靈處。（朱子語類卷六十三、廿八頁）

問鬼神之德。如何是良能功用處。曰。論來只是陰陽屈伸之氣。只謂之陰陽亦可也。然必謂之鬼神者。以其良能功用而言也。今又須從良能功用上。求見鬼神之德始得。（同上、廿五頁）

と云へり。此れに據れば鬼神は陰陽を外にして存在するものにあらずと雖も、陰陽その物を謂ふにあらずして、陰陽二氣の功用の靈妙なる處を謂へること明かなり。而して朱子は更に程子の以功用謂之鬼神。以妙用謂之神。の言に據りて之を說明して以爲らく、

功用兼精粗而言。是說造化。妙用以其精者言。其妙不可測。功用言其氣也。妙用言其理也。功用是有迹底。妙用是無迹底。（近思錄集注卷一、六頁）

鬼神者有屈伸往來之迹。如寒來暑往日往月來春生夏長秋斂冬藏。皆鬼神之功用。此皆可見也。忽然而來。忽然而往。方如此又如彼。使人不可測知。鬼神之妙用也。（同上）

鬼神の功用と云へると神の妙用と云へるとを區別すれば、此の如く功用は氣の精粗を兼ね言ひ而も見るべきの形迹あり、妙用は氣の精英なるものを言ひ而も何等見るべきの形迹なきなり。且合せていへば、鬼神と云ふときは神はその中に含まれて鬼神の外別に神なるものあるなく、析つていへば鬼神は陰陽の功用、神は陰陽の妙用を指すべし。之を要するに鬼神なるものは陰陽の作用の靈妙不可思

議なる處を云へるものと見ざるべからず。然るに此の靈妙なる作用は何によりて起るかと云へば、陰陽の氣の往來屈伸する間に太極なる理ありて之を主宰するが故なりと謂はざるべからず。蓋し理あれば必ず氣あり氣あれ必ず理あるは宇宙の原則にして、陰陽の氣の中には太極なる理具はりて氣を主宰するあるを以て靈妙なる鬼神的作用を爲すを得べし。若しその裏面に太極の存するとなかりせば、物として在らざるなく、時として然らざるなき鬼神も、靈妙なる作用を呈することなかるべし。然れども太極なる理卽ち神なりと謂ふべからざれば、太極と鬼神とは分別して見ざるべからず。而して此の靈妙なる神的作用を人格化したるもの、卽ち天地宇宙の主宰的精神機能、更にいへば宇宙的神靈にして、宗教的信念の上より見たる鬼神は之を指すなり。故に宗教的信念上の鬼神も哲學的考察上の鬼神もその實同一にして異ならざること、佛教に於て哲學的に眞如と云へるものを宗教的に阿彌陀佛と云へるが如し。朱子は鬼神が理の顯現昭著に外ならざることを說いて左の如く云へり。曰く、

鬼神主二乎氣一。爲二物之體一。物言二乎形一。待レ氣而生。蓋鬼神是氣之精英。所レ謂誠之不レ可レ掩者誠實也。言鬼神是實有者。屈是實屈。伸是實伸。屈伸合散。無二非レ實者一。故發見昭々不レ可レ掩如レ此。（朱子語類卷六十三、廿四頁）

誠是實然之理。鬼神亦只是實理。若無二這理一。則便無二鬼神一。無二萬物一。都無レ所二該載一了。鬼神之爲レ德者誠也。德只是就二鬼神一。言二其情狀一。皆是實理而已。（同上、三十頁）

七五

此れに據れば、鬼神の能く靈妙不可測にして發見の昭著揜ふべからざるものは、もと太極實然の理の然らしむる所なり。若し氣の功用のみならば只盲目的に活動するのみにして靈妙不可測なることあるべからず。然るに宇宙間の萬化萬象一として理氣の妙合によりて成らざるものなきを以て、氣によりて形を成すと共に、理も亦賦與せられざるなし。而して鬼神亦理氣の妙合によりて成りてその神靈妙用の不可思議なる處を云へるものとすれば、太極が萬化萬象の中に存するが如く、鬼神も亦萬化萬象を生ずる根幹となりて存するものならざるべからず。蓋し理氣と鬼神とはもと同體不離にして一は理氣それ自體に就て云ひ、一はその妙用を云ふの相異に過ぎざればなり。故に中庸には視レ之而弗レ見。聽レ之而弗レ聞。體レ物而不レ可レ遺。と云ひ、朱子亦之を承けて

天下豈有三一物不二以レ此爲レ體。天地之升降。日月之盈縮。萬物之消息變化。無下一非二鬼神之所レ爲者上。是以鬼神雖レ無二形聲一。而徧體二乎萬物之中一。物莫二能遺一也。（中庸大全第十六章引）

天下之物。莫レ非二鬼神之所レ爲也。故鬼神爲二物之體一。而物無下不二待レ是而有一者上。然曰レ爲二物之體一。則物先二乎氣一。必曰レ體レ物。然後見三其氣先二乎物一。而言順耳。猶二木之有レ幹。必先有レ此。而後枝葉有レ所レ附而生焉。（中庸或問、七十三頁）

と云へり。然らば萬物の根柢となるものは鬼神にして萬化萬象は悉く鬼神の顯現にあらざるなし。故に宇宙に存する鬼神は全體の鬼神にして、萬象萬化の中に存する鬼神は部分の鬼神と云ふを得ざ

るにあらず。但朱子には此の如く區分せる言なくして其の意あるのみ。

前に述べたるが如く、鬼神が能く神靈的妙用を爲すを得る所以のものは、鬼神の根柢に然らしむる所以の太極の存するに由るものなれば、此の點より見るときは鬼神は形而上の理なるが如し。然るに神靈的妙用の昭著顯然の揜ふべからざる所は是れ氣の然る所なれば、此の點より見るときは形而下の器と云はざるべからず。鬼神を以て形而上と爲すべきか形而下と爲すべきかに就ては、後世學者の議論のある所なれども、朱子は鬼神を以て形而下の氣となせり。今朱子語類に據るに、

問向讀二中庸所一レ謂誠之不一レ可一レ揜處一。竊疑謂二鬼神一爲二陰陽屈伸一。則是形而下者。若二中庸之言一。則是形而上矣。曰。今且就二形而下者一說來。但只是他皆實理處發見。故未レ有二此氣一。便有二此理一。既有二此理一。便有二此氣一。（朱子語類卷六十三、廿八頁）

直卿云。看來神字本不二專說一レ氣。也可下就二理上一說上。先生只就二形而下者一說。先生曰。所下以某就二形而下一說上。畢竟就二氣處一多發二出光彩一。便是神。（同上卷九十五、八頁）

と云へるが如き卽ち是れなり。蓋し鬼神は所以然の理なる太極の陰陽の氣を通じて顯現したる昭著の處に就て云ふものなれば、たとひ理の之れに主たるものありと雖も、之を形而下に屬せざるを得ず。朱子が鬼神を以て形而下と爲しゝは是れが爲めなり。然るに後世に至りて鬼神を以て形而上下の間と見るものあり。吳程は此の理を說いて

鬼神雖二是說一氣。而理實在二其中一。故迹專以一氣言。而良能兼以一理言。然後其意始備。大抵理形而上。氣形而下。而鬼神形而上下間也。不一然朱子何以曰三良能是說二往來屈伸皆理之自然。不一假二安排布置一。（中庸大全十六章廿七頁引）

と云ひ李榕村も亦此れと同一の說を爲して

鬼神非一理非一氣。而在二理氣之間一。在一人則心之神明是也。程張所一謂天地造化陰陽二氣者。是這箇。本文所一謂祭祀如一在者。亦是這箇。體二於人心一。爲二人心之鬼神一。亦卽是這箇。認得眞。便看得活。（榕村語錄卷七、十七頁）

と云ひ、吳竹如も亦同じく、

竊謂形而下者爲一物。形而上者爲一理。神則在二形上形下之間一。究一之神乃氣之精英。而能妙二此理一者。實亦形而下者而已。（拙修集卷三、七頁）

と云へり。吳程及び吳竹如が鬼神を以て形而上下之間者也と云ひ、李榕村が非一理非一氣。而在二理氣之間一と云へるものその理なきにあらざるが如しと雖も、その實は甚だ不徹底の言たるを免れず。蓋し天下のこと之を分別すれば理にあらずんば氣、氣にあらずんば理となるべく、又之を綜合すれば理氣妙合して決して分離するを得べきものにあらず。未だ理にあらず氣にあらずして理氣の間なるものあることなく、又形而上下の間なるものもあるべからざるなり。朱子が中庸の鳶飛魚躍の章

を解して、

子思引二此待一。以明二化育流行上下昭著莫レ非二此理之用一。所謂費也。然其所二以然一者。則非二見聞所レ及。所謂隱也。（中庸章句第十二章）

と云ひ、又侯氏が鬼神形而下者非レ誠也。鬼神之德則誠也と云へるを駁して、

今侯氏乃析三鬼神與二其德一爲二二物一。而以二形而上下一言レ之。乍讀如二可レ喜者一。而細以二經文事理一求レ之。則失レ之遠矣。（中庸或問、七十三頁）

と云ひ、及び前に擧げたる定義に以二二氣一言。則鬼者陰之靈也。神者陽之靈也。と言へるを見れば鬼神その物は理にあらずして、理の氣を通じて顯はれたる處を云へるものなれば、之を形而下と見ざるべからず。而して朱子の本旨亦此こに在りしこと疑を容れざるなり。

（二）在レ人鬼神　前に述べたるが如く、朱子は鬼神を分つて宇宙に存在する鬼神と人に在るの鬼神と爲せり。然れども人に在るの鬼神は卽ち宇宙に存在する鬼神にして、宇宙に存在する鬼神の外別に人に在るの鬼神あるにあらず。但宇宙に在りては鬼神と云ひ人に在りては魂魄と云ふの相違あるが如くなれども、相通ずれば宇宙に在りても人に在りても同じく鬼神と云ひ得べきなり。前に云へるが如く、鬼神なるものは物の根幹にして宇宙に於ける萬物一として鬼神によりて生ぜざるものなければ、獨り人のみならず萬化萬象悉く鬼神の顯現にあらざるなし。呂大臨の言に、萬物之生。

莫レ不レ有二是氣一。氣也者神之盛也。莫レ不レ有二是魄一。魄也者鬼之盛也。故人亦鬼神之會也。（朱子全書卷五十一）とあるもの是れなり。朱子亦此の意を説いて曰く、

問二生死鬼神之理一。曰。天道流行。發二育萬物一。有レ理而後有レ氣。雖二是一時都有一。畢竟以レ理爲レ主。人得レ之以有レ生。氣之清者屬レ陽。濁者屬レ陰。知覺運動。陽之爲也。形體陰之爲也。氣曰レ魂。體曰レ魄。淮南子註曰。魂者陽之神。魄者陰之神。所レ謂神者以二其主一乎形氣一也。人所二以生一精氣聚也。人只有二許多氣一。須レ有二箇盡時一。盡則魂氣歸二于天一。形魄歸二于地一而死矣。（朱子語類卷三、五頁）

此れに據れば、人は理氣の妙合によりて成れるものなれども、吾人の有する魂魄なるものは宇宙の氣の吾人に存するものにして、魂は陽に屬し魄は陰に屬し、魂は神の盛なるものにして魄は鬼の盛なるものなり。且人の生存中は魂之れが主となりその死するや魄之れが主となり、永遠に存して滅亡するものにあらず。朱子又人の魂魄と宇宙の鬼神と同一不二なることを説いて、

鬼神不レ過二陰陽消長一而已。亭毒化育風雨晦冥皆是。在レ人則精是魄。魄鬼之盛也。氣是魂。魂者神之盛也。精氣聚而爲レ物。何物而無二鬼神一。遊魂爲レ變。魂遊則魄之降可レ知。（同上卷三、二頁）

言二魂魄鬼神之説一曰。只今生人。便自一半是神。一半是鬼了。但未レ死以前。則神爲レ主。已死之後。則鬼爲レ主。縱横在二這裏一。以二屈伸往來之氣一言レ之。則來者爲レ神。去者爲レ鬼。以二人身一

言レ之。則氣爲レ神。而精爲レ鬼。然其屈伸往來。也各以レ漸。（同上卷三、九頁）

問鬼神便是精神魂魄如何。曰然。且就二這一身一看自會。笑語有二許多聰明知識一。這是如何得二恁地一。虛空之中。忽然有レ風有レ雨。忽然有レ雷有レ電。這是如何得二恁地一。這都是陰陽相感。都是鬼神。看得到二這裡一。見下一身只是箇軀殼在二這裡一。內外無上非二天地陰陽之氣一。所三以夜來說二道天地之塞吾其體。天地之帥吾其性一。思量來只是一箇道理。（同上卷三、八頁）

と云へり。此れに由りて之を觀れば、吾人の有する精神魂魄は卽ち宇宙に存する鬼神の吾人に存するものにして、鬼神を外にして魂魄あることなし。而してその吾人に存する氣の積極的活動的なるを魂と云ひ消極的靜止的なるを魄と云ふこと、是れ亦宇宙の氣の積極的活動的の靈妙なるを神と爲し消極的靜止的の靈妙なるを鬼と爲すと同一なり。故に鬼神を對待より見れば二にして流行より見れば一なるが如く、魂魄は二にして一、一にして二なりと謂ふを得べし。朱子以爲らく、

動者魂也。靜者魄也。動靜二字。括二盡魂魄一。凡能運用作爲皆魂也。魄則不レ能也。今人之所二以能運動一。都是魂使レ之爾。魂若去魄則不レ能也。（同上卷三、十頁）

問二魂魄一。曰魄是一點精氣。氣交時便有二這神一。魂是發揚出來底。如二氣之出入消息一。魄是如レ水。人之視能明聽能聽。心能强記底。有二這魄一。便有二這神一。不二是外面入來一。魄是精魂是氣。魄主レ靜。魂主レ動。（同上卷三、九頁）

之を要するに、宇宙に在ると人に在ると を論せず、鬼神なるものは唯陰陽なる氣の靈妙不可思議なる處を云へるものにして、陰陽を外にして別に鬼神あるにあらず。而してその靈妙なるは理の然らしむる所なり。若し宇宙に鬼神なる一種特別の神靈ありとするものあらば、妄論と謂はざるべからず。朱子が二程初不レ說レ無二鬼神一。但無二如今世俗所レ謂鬼神一耳。古來聖人所レ制祭祀。皆是他見二得天地之理如レ此。（語類卷三）と云へるを見れば古來彼邦に在りて一種特別の鬼神を信じたること明かにして、朱子は未だ嘗て此の如きものゝ存在を信じたることなし。然れども時に迷信に陷れるが如く思はるゝ所あるは惜しむべきことなり。

前に述ぶるが如く鬼神は理の氣を通じて發見する妙用を指したるものにして、而も此の鬼神は萬物の根幹となり萬物一として鬼神の顯現にあらざるなく、吾人亦鬼神の顯現に外ならざるを以て、鬼神はすべてに相感通するものなり。故に天地山川の鬼神たると人の鬼神たるとを問はず、吾人が誠敬を以て祭れば、吾人の誠敬の念と鬼神の神靈と相感應して所レ謂使下天下之人齊明盛服以承二祭祀一。洋々乎如レ在二其上一。如レ在二其左右一。相感通せざるを得ざる所あるべし。朱子が

是這箇天地陰陽之氣。人與二萬物一皆得レ之。氣聚則爲レ人。散則爲レ鬼。然其氣雖二已散一。這箇天地陰陽之理。生々而不レ窮。祖考之精神魂魄雖二已散一。而子孫之精神魂魄。自有二些小相屬一。故祭祀之禮。盡二其誠敬一。使二以致二祖考之魂魄一。這箇自是難レ說。看既散後一似二都無一了。能盡二其

誠敬。便有感格。亦緣是理常只在這裡也。（同上卷三、十五頁）

人死雖終歸於散。然亦未便散盡。故祭祀有感格之理。先祖世次遠者。氣之有無不可知。然奉祭祀者。既是他子孫。畢竟只是一氣。所以有感通之理。然已散者不復聚。釋氏却謂人死爲鬼。鬼復爲人。如此則天地間常只是許多人來々去々。更不由造化生々。必無是理。（同上卷三、五頁）

と云へるもの卽ち是れなり。此れに由りて觀れば吾人の魂魄を成す鬼神の原質はもと消滅すべきものにあらずと雖も、人の死するや魂は天に歸し魄は地に歸し悉く原形質を留めずして分散して迹なきに至る。然れども是れ我が魂魄の分散に過ぎざるを以て能く感格するを得るなり。かの釋氏の所謂輪廻の說の如きは畢竟想像の說に過ぎずして何等實證の見るものなきを以て、朱子は之を斷じて必無此理ものと爲せり。然るに鬼神の感應は獨り祖考の神靈のみに止まらず、宇宙の神靈も亦同じく誠敬を以て之を祭れば自然の感應あるべし。故に朱子は左の如く云へり。

鬼神是本有底物事。祖宗亦只是同此一氣。但有箇總腦處。子孫這身在此。祖宗之氣便在此。他是有箇血脈貫通。所以神不歆非類。民不祀非族。只爲這不相關。如天子祭天地。諸侯祭山川。大夫祭五祀。雖不是我祖宗。然天子者天下之主。諸侯者山川之主。大夫者五祀之主。我主得他。便是他氣又總統在我身上。如此便有箇相關處。（同上卷三、十六頁）

以上述ぶる所に據れば朱子は汎神論者又は萬有神教論者と云ふべき人にして、宇宙に太極なる理と陰陽なる氣と妙合して神靈なる作用を爲す一大神靈的鬼神の存在すると共に、吾人にも理と氣と妙合して成れる至靈至妙の心卽ち鬼神の存在するを信ぜり。然るに此の鬼神なるものは太極及び陰陽を離れて別に存するものにあらずして、太極なる理が陰陽なる氣を通じて現はれて昭著なるものを云ふ。故に太極之れが根原となりて存すと雖も、その發見昭著なる處に就て云ふものなれば、形而上下の間なるものにあらずして形而下のものと謂はざるべからず。而して此の鬼神を人格化したるもの卽ち宇宙神にして、朱子は此の宇宙神の存在を信ずるを以て、誠敬を以て之を祭祀すれば必ず來格すべきものと爲し、鬼神の不滅を信ぜり。此れに據れば朱子は決して無神論者にあらず。然れども世の所謂有神論とその趣旨を異にすることは上來述べ來る所によりて明かに知らるべし。

第四章　理氣觀

第十一節　不雜の看

余は以上に於て理と氣とを分別して太極の理の如何なるものなるか、又陰陽五行の氣の如何なるものなるかの大要を述べたれば、是れより理と氣との關係に就て朱子が如何なる思想を有せしかを考察すべし。朱子の說に據れば此の二者の關係は不雜不離の二方面より觀察するを得べし。而して

此の二看は實存のまゝを觀たるものにあらずして、吾人の考察によりて或は綜合し或は分別して觀たる思考論なるを知らざるべからず。朱子は此の不雜不離の二看を稱して又離看合看とも云へり。不雜看は卽ち所謂離看に當り、不離看は所謂合看に當るべし。その言に

一陰一陽之謂レ道。陰陽何以謂二之道一。曰。當二離合看一。（朱子語類卷七十四、廿二頁）

とあるもの卽ち是れなり。而して看とは今の所謂認識の意味を有するを以て離看合看は卽ち理氣を或は綜合的に或は分析的に認識するを云ふ。而して此の二看は前に述べたる統體の理及び各具の理の看法と相似たる所あれども、その間に自ら混同すべからざる所あり。卽ち統體の理及び各具の理は專ら太極なる理のみに就て全體と部分とに分ちて看たるものなれども、不雜不離の二看は理と氣との相關する所に就て看るものなれば統體各具の二觀とは自ら異なる所あり。今先づ不雜看に就て考察するに、朱子は全く理と氣とを分別して或は氣を雜へずして理のみを看、或は理を雜へずして氣のみを看ることあり。余が先づ理の方面より實體を說き次ぎに氣の方面より現象を說けるが如きは此の不雜看に從ひたるものにして、只考察の便によりて分別したるに過ぎず。而して不雜看に就ては朱子は又之を二箇に分てり。卽ち一面よりは假りに理と氣とを分別して對立せしめ、一面よりは理と氣とを分別して理先氣後と爲すもの是れなり。理と氣とは本來不離的のものにして分別するを得るものにあらざれども、吾人の考察によりては假りに之を分別すれば理は氣にあらず氣は理に

あらず二個各別のものと認むることを得べし。

（甲）理氣對立　蓋し理と氣卽ち本體と現象とはもと相對的のものにあらずして、現象は本體の顯現に過ぎざれども、吾人が有限の現象世界に立ちて考察すれば、相對的ならざるものを假りに分別して相對立せしむるを得べし。然れども此れは根本的のものにあらずして吾人の思考上の假定に過ぎざることを知らざるべからず。故に朱子は此の思考的假定の上に立ちて先づ氣を雜へずして理を說いて以爲らく、

○此所レ謂無極而太極也。所二以動而陽靜而陰一之本體也。然非レ有三以離二乎陰陽一也。卽二陰陽一而指二其本體不レ雜二乎陰陽一而爲レ言耳。（太極圖解）

五行一陰陽也。陰陽一太極也。太極本無極也。此當レ思レ無下有二陰陽一而無二太極一底時節上。若以爲二止是陰陽一。陰陽却是形而下者。若只專以レ理言。則太極又不下曾與二陰陽一相離上。正當下沈潛玩索將二圖象意思一。抽開細看。又復合而觀之。某解レ此云。非レ有レ離二乎陰陽一也。卽二陰陽一而指二其本體不レ雜二乎陰陽一而爲レ言也。此句自有三三節意旨一。更宜二深考一。（朱子語類卷九十四、四頁）

此れに據れば、太極なる理と陰陽なる氣とは本體上より見ても現象上より見ても本來分離すべからざるものなれども、假りに陰陽の氣と太極なる理とを分離して觀れば理と氣とは別箇のものとして分別するを得べし。故に朱子は又

太極圖。無極而太極。上一圈卽是太極。但挑出在レ上。（同上卷九十四、一頁）

と云へり。然れば理と氣とを分別したるは氣の中より理のみを抽き出して觀たるものなれば、具象的の議論にあらずして、一の抽象的議論と謂はざるべからず。故に此の如き理は現實に存在するものにあらず、只吾人の觀念の上に存するに過ぎず。もし氣を離れたる理が空間に存在するものと觀れば、是れ一種の空想忘念の類にして實際に於てあり得べからざることなり。是れ朱子が卽二陰陽一而指二其本體一。不レ雜二乎陰陽一而爲レ言耳。と云へる所以にして抽象論としては立派に成立するを得べし。朱子は此の如く氣を雜へずして理のみを觀るが故に、その議論は理と氣とは自ら二分せられて二者相對立するものゝ如く說かざるを得ざることゝなるべし。然れども是れ當然の結論なりとす。

朱子が

所レ謂理與レ氣。此決是二物。但在二物上一看。則二物渾淪。不レ可三分開各在二一處一。然不レ害三二物之各爲二一物一也。若在二理上一看。則雖レ未レ有レ物。而已有二物之理一。然亦但有二其理一而已。未三嘗實有二是物一也。（朱子文集卷四十六、廿六頁）

と云へるは卽ち是れなり。此れに據れば理と氣とを分別して觀るときは、理は自ら理にして氣にあらず、氣は自ら氣にして理にあらず、此の二者の分界は截然として區別ありと謂はざるべからず。然れども現象の上に就て之を見れば理と氣とはもと渾然として分別し得べからず。又本體の點に就

て之を見るも理は氣を包涵して理の外に氣あるにあらざれば、是れ亦分別し得べきものにあらず。故に理氣を分つて二物と爲すの畢竟抽象論たるを知るべきなり。朱子は更に此の理を說いて

天地之間。有レ理有レ氣。理也者形而上之道也。生レ物之本也。氣也者形而下之器也。生レ物之具也。是以人物之生。必稟二此理一。然後有レ性。必稟二此氣一。然後有レ形。其性其形。雖レ不レ外二乎一身一。然其道器之間。分際甚明。不レ可レ亂也。詩曰。天生二蒸民一。有レ物有レ則。周子曰。無極之眞。二五之精。所レ謂眞者性也。所レ謂精者氣也。所レ謂物者形也。所レ謂則者性也。上下千有餘年之間。言者非二一人一。記者非二一事一。而其說之同。如レ合二符契一。（同上卷五十八、五頁）

と云へり。此の說は天が人物に理と氣とを賦與したる上に就て理と氣とを對立せしめて述べたるものなり。然るに天地之間。有レ理有レ氣。理也者形而上之道也。生レ物之本也。氣也者形而下之器也。生レ物之具也。と云へる所に據れば、その間に體用の區別を認めたること明かなり。蓋し體用一源、顯微無間にして分離すべからざるものなれども、之を思考上より見れば體と用又は實在と現象とを分別せざるべからず。是れ朱子が不雜看又は分別看の上より理氣を分ちたる所以なり。然るに世の學者の中には朱子が理氣を分つて二と爲し、理與レ氣此決是二物と云ひ、天地之間。有レ理有レ氣と云へるを根據として、朱子を以て理氣二元論者と爲すものあり。朱子の說は決して理氣二元論と爲すべきものにあらず。朱子は理與レ氣此決是二物と云へるも、理與レ氣此決二元とは未だ嘗て言はざる

なり。而して二物と云ふと二元と云ふとはその間に大なる相違あることを知らざるべからず。蓋し二物とは理と氣とを分離すれば二物と爲して觀るを得べしと云ふに過ぎざれども、二元とは理も宇宙を構成する一原理なると共に、氣も亦宇宙を構成する一原理なりとの意味に外ならず。然るに朱子は理を以て生レ物之本也と云ひ、氣を以て生レ物之具也と云ひ、その間に體用を分つ所より云へば分つて二物となすと雖も未だ嘗て理氣を以て宇宙の二元理と爲したることあらざるなり。且體と用とを二元理と爲し實在と現象を二元理と爲すが如きは少しく事理を解するものゝ言はざる所なり。朱子にして猶之を爲すと云ふか。是れ朱子を誣ふるものと謂はざるべからず。且朱子の說を以て理氣二元論とすれば、朱子が不離看によりて理一元論を立てたるものと矛盾す所ありて、その說は到底成立するを得ざるべし。朱子豈かゝる矛盾の說を立つるものならんや。是れ皆眞に朱子の學說を解する能はざるより起れる妄說と謂はざるべからず。

(乙)理先氣後　朱子の理氣に對する考察は前に述ぶるが如く一面より見れば理氣對立の觀あり、蓋し本體と作用とを分ち實在と現象とを分つて見れば、本體ありて作用あり、實在ありて現象ありと云はざるべからず。是れ朱子に理先氣後の說ある所以なり。惟ふに理氣の本體より云ふも現實より云ふも、理あれば必ず氣あり、氣あれば必ず理あるものにして、先後を以て謂ふべきものにあらず。然るに吾人の思考上に於ては體用の關係上理を以て先と爲し氣を以て後と爲し得べからざるに

あらず。是に於て朱子はその理を說明して

問。先有レ理。抑先有レ氣。曰。理未㆓嘗離㆒乎氣㆒。然理形而上者。氣形而下者。自㆓形而上下㆒言。豈有㆓先後㆒。理無レ形。氣便粗有㆓渣滓㆒。（朱子語類卷一、二頁）

問。昨謂㆘未レ有㆓天地㆒之先。畢竟是先有㆑理。如何。曰。未レ有㆓天地㆒之先。畢竟也只是理。有㆓此理㆒便有㆓此天地㆒。若無㆓此理㆒。便亦無㆓天地㆒無レ人無レ物。都無㆓該載㆒了。有レ理便有レ氣。流㆓行發㆒育萬物㆒。（同上卷一、一頁）

問。有㆓是理㆒便有㆓是氣㆒。似レ不レ可レ分㆓先後㆒。曰。要レ之也先有レ理。只不レ可レ說㆘是今日有㆓是理㆒明日却有㆑是氣㆒。也須レ有㆓先後㆒。且如萬一山河天地都陷了。畢竟理却只在㆓這裏㆒。（同上卷一、一頁）

と云へり。此れ等の言は皆太極を主として見たるものにして、體用の關係より云へば、用ありて後體ありとは謂ふべからずして、必ず體ありて後用ありと謂はざるべからず。然るに陰陽を主として見るときは太極なる理は陰陽の中に存し陰陽以外に別に存するものにあらず。太極を主とするものは本體上より考察したるものにして、陰陽を主とするものは現象上より見たるものなれば、是れ亦決して矛盾するものにあらず。語類に載する所の言に據れば、

或問。必有㆓是理㆒。然後有㆓是氣㆒如何。此本無㆓先後之可㆒言。然必欲レ推㆓其所㆓從來㆒。則須レ說㆓先有㆓此理㆒。然理又非㆓別爲㆓一物㆒。卽存㆓乎是氣之中㆒。無㆓是氣㆒則此理亦無㆓掛搭處㆒。（同上卷一、三頁）

問。太極不下是未レ有二天地一之先。有二箇渾成之物一。是天地萬物之理總名上否。曰。太極只是天地萬物之理。在二天地一言。則天地中有二太極一。在二萬物一言。萬物中各有二太極一。未レ有二天地一之先。畢竟是先有二此理一。動而生レ陽。亦只是理。靜而生レ陰。亦只是理。（同上卷一、一頁）

と云へるもの是れなり。此の言は前に引く所と異なり一半は理を主として說き、一半は氣を主として說けり。此れに據れば現象上より云へば此の理は氣中に在りて此の氣なくんば理の存すべきものにあらざれども、本體上より云へば太極なる本體ありて然る後氣なる用ありと謂はざるを得ざれば理先氣後となるべきなり。然れども此の理先氣後の說は理氣對立說と同じく、もと吾人の思考上の問題に屬するものにして、思考を離れて存するものにあらず。蓋し理はもと無窮の存在にして氣も亦無窮の存在なれば、理氣本來の性質より云へば固より時間的に先後を分別するを得べきものにあらざれども、吾人の思考上に於ては假りに時の先後を分別し得ざるにあらず。是れ朱子に理先氣後の說ある所以なり。若し現實世界に於て理氣の間に先後の別ありと云はゞ固より一種の迷妄なるべし。然れども吾人の思考上に於ては、その時間上の分別を立て得らるべきものにして決して迷妄の論議と謂ふべからず。但此の問題はもと吾人の思考上の假定たることを忘るべからず。之を要するに、此の問題はもと分離すべからざるものを、その思考の上に於て强いて理氣を分離して考察したものなれば、理と氣との二物となること前の理氣對立論と同一の結果を生ず。故に是れ亦理氣二元

論と謂ふべからざること前に言へるが如し。

惟ふに理先氣後の說は吾人の思考上より見たる時間的關係の問題にして、理氣同在の說は空間的關係の問題なり。然るに空間的關係より見たるものは現象卽實在にして不離觀より見たるものなれば、何人にも理解せられ易きを以て後人の異論を招かざれども、體用問題を思考上より時間的關係として見ることは甚だ理解し難き所あるを以て後人の議論少からず。然れども此れを以て思考上の問題として見れば此の議論は成立するを得べきものにして精到の論と謂はざるべからず。

然るに明代に至りて朱子學派の羅整菴は朱子の不離看に對しては同意したれども、此の不雜看より觀たる理氣決是二物と云へる議論に對して此の說を以て不離看より見たるものと矛盾するものとせり。

周子太極圖說。篇首無極二字。如二朱子之所二解釋一。可レ無レ疑矣。至二於無極之眞。二五之精。妙合而凝三語一。愚則不レ能レ無レ疑。凡物必兩。而後可二以言レ合。太極與二陰陽一果二物乎。其爲レ物也果二。則方二其未レ合之先一。各安在乎。朱子終身認二理氣一爲二二物一。其源蓋出二於此一也。愚也積二數十年潛玩之功一。至レ今未二敢以爲レ然也。（困知記下卷之二、八頁）

所レ謂朱子小有二未レ合者一。蓋其言有レ云。理與レ氣決是二物。又云氣强理弱。理管二攝他一不レ得。又云若二此氣一。則此理何處頓放。似レ此類頗多。惟答二柯國材一一書有レ云。一陰一陽往來不レ息。

卽是道之全體。此語最爲直截。有合於程伯子之言。然不多見。不知竟以何者爲定論也。（同上上卷之一、頁八）

と云へるもの卽ち是れなり。此れに類したる議論はその著困知記の諸處に散見す。羅整菴數十年潛玩の功を積んで獨朱子の意の在る所を了解すること能はざりしは怪しむべきなり。羅整菴が此の說を取らざりし所以のものは、蓋しその說の根柢に於て朱子と異なれるものを抱持せしが爲めなるべし。（イ）そは羅整菴の見たる理と朱子の所謂理とその意味を異すること。（ロ）羅整菴は氣一元論者なるに朱子は理一元論者なりしこと。（ハ）羅整菴は朱子の所謂不離不雜の意味を誤解したること。の三箇條に歸すべし。

（イ）朱子の說く所に據れば、理には二箇の意味ありてその本體的絕待的の根本原理を稱して所以然の理と云ひ、此れを以て萬化萬象の由り生ずる根原と爲し、又その現象的相待的の理を稱して所當然の理と云ひ、此れを以て現象世界に行はるゝ條理法則と爲し、所以然の理の顯現したるものと爲せること第九節に於て述べたるが如し。然るに羅整菴は理に朱子の所謂所以然の理なる根本原理あるを知らずして、所當然の理なる現象の理を以て理と爲せり。是れ朱子の說と根本的相違を生ずる所以なり。羅整菴の說に以爲らく、

理只是氣之理。當於氣之轉折處觀之。往而來。來而往。便是轉折處也。夫往而不能不

九三

レ來。來而不レ能レ不レ往。有下莫レ知三其所二以然一而然上。若下有二一物一主三宰乎其間一。使二之然一者上。此理之所二以名一也。易有二太極一此之謂也。（周知記續卷三、十八頁）

是れ整菴の所謂理にして朱子の所謂所以然の理にあらず。故に朱子の說より見れば第二義に屬する理に當るべし。是れ羅整菴が自己の見解を以て朱子の所謂理を解したるものなれば、その勢朱子の說に反對せざるを得ざることゝなりしなり。

（ロ）羅整菴は理を以て氣中の條理法則の意味に解したるを以て遂に張橫渠の氣一元論と同じく氣一元論を取ることゝなりて朱子の理一元論に反對せり。その言に

蓋通二天地一亘三古今一。無レ非二一氣一而已。氣本一也。而一動一靜。一往一來。一闔一闢。一升一降。循環無レ已。積レ微而著。由レ著復レ微。爲二四時之溫涼寒暑一。爲二萬物之生長收藏一。爲二斯民之日用彝倫一。爲二人事之成敗得失一。千條萬緒。紛紜膠轕。而卒不レ可レ亂。有下莫レ知三其所二以然一而然上。是卽所レ謂理也。初非下別有中一物依三於氣一而立。附二於氣一以行上也。（同上卷上之一、七頁）

とあるもの卽ち是れなり。此の說は王陽明、吳蘇原等の說く所と殆ど同一にして、吾朝の貝原益軒伊藤仁齋等一派の說とも亦大同小異なり。羅整菴は朱子の說と根柢より相違せる此の說を取れるものなれば朱子の說に對して疑を挾むは當然のことと謂はざるべからず。

（ハ）羅整菴は朱子の所謂不離及び不離の意味を理解すること能はざるものに似たり。その林次崖

に答へたる書に據るに左の言あり。

夫父之慈子之孝。猶二水之寒火之熱一也。謂下慈之理不レ離二乎父一。孝之理不レ離二乎子一。已覺三微有二罅縫一矣。謂下慈之理不レ雜二乎父一。孝之理不レ雜二乎子一。其可レ通乎。（困知記附錄卷六、三十三頁）

然るに此の問題はもと思考上の問題にして事實上のことにあらず。故に思考上よりいへば父の身と慈の理とを分別し、子の身と孝の理とを分別して考察し得られざるにあらず。是れ猶身體と精神とを分離して思考するを得るが如し。羅整菴は此の問題のもと吾人の觀念に屬することを知らざるが爲めに、その理を解する能はざりしなり。その他朱子學者たると他派の學者たるとを問はず、朱子の理一元論に反對し及び朱子の說を以て理氣二元論と爲すものは、大抵理を以て條理法則の意味に解して氣一元論又は理氣一元論を取り、及び不離不雜の意味を解すること能はざるに起因せざるもの稀なり。

明の薛敬軒は朱子の說を遵奉せる學者にして、羅整菴の如く不離不雜の意義を解すること能はざるにあらざれども、朱子の理先氣後の說には反對して理氣の同時同在なるべきを主張せり。その言に曰く、

理只在二氣中一。決不レ可レ分二先後一。如二太極動而生レ陽。動前便是靜。靜便是氣。豈可レ說二理先而氣後一也。（讀書錄類編卷十三、三頁）

理氣本不レ可レ分二先後一。但語二其微顯一。則若三理在二氣先一。其實有則具有。不レ可下以二先後一論上也。（同上）

或言未レ有二天地一之先。畢竟先有二此理一。有二此理一便有二此氣一。竊謂理氣不レ可レ分二先後一。蓋未レ有二天地一之先。天地之形雖レ未レ成。而所三以爲二天地一之氣。則渾々乎未二嘗間斷止息一。而理涵二乎氣之中一也。及二動而生レ陽而天始分一。則理乘二是氣之動一。而具三于天之中一。靜而生レ陰而地始分。則理乘二是氣之靜一。而具三于地之中一。分レ天分レ地。而理無レ不レ在。一動一靜。而理無レ不レ存。以至下化二生萬物一。萬物生々而變化無上窮。理氣二者。蓋無二須臾之相離一也。又安可レ分二孰先孰後一哉。（同上卷十三、七頁）

此の說はもと朱子の不離看に據りたるものにして、朱子も不離看より觀れば理氣の先後を分たずして、「二者有則皆有」と爲せり。故に語類に、「問太極動而生レ陽。靜而生レ陰。見二得理先氣後一。曰雖二是如レ此。亦不レ須二如レ此理會一。二者有則皆有。」の言あり。然れども所謂理先氣後は前に述べたるが如く思考上の問題にして體と用、形而上と形而下の關係より强いて之が限度を立つるものなれば體は先にして用は後、形而上は先にして形而下は後、更に云へば實在は先にして現象は後なりと云ひ得ざるにあらず。故に薛敬軒も「語二其微顯一。則若三理在二氣先一。」と云へるにあらずや。今姑く人事に就て之を見るに吾人が惻隱羞惡の氣を發するは、先づ仁義の理の根本たるもの中に存するに

由らずんばあらず。而して理は未發にして氣は已發なり。此の理先づ中に充滿實在するを以てその已發に及んで自ら條理あるを得るものなり。宇宙に於けるも亦然り。今陰陽に就て其の然る所以を推原したるものとすれば、先づ理ありて後氣ありと云ふべからざるにあらざるなり。故に陸梓亭も此の理を說いて以爲らく、

太極在二陰陽之先一者。似三乎在二陰陽之外一。然此只是卽二陰陽一。推二其所以然一。如二陰陽之一動一靜一氣也。然必先有二動靜之理一而後二動靜一。此之謂二所以然一也。所以然只就二陰陽上一推出。原不レ離二陰陽一。不下是另有二一箇太極在レ前。生中出陰陽來上。（思辨錄輯要後集卷之一六頁）

此の說能く朱子の意を得たり。もし能く此意味を理解すれば理先氣後の說に就て疑を生ずることなかるべきなり。

第十二節　不離の看

不離看は前に述べたる不雜看とは全く反對にして、不雜看を以て分別觀とすれば不離看は綜合觀と謂ふを得べし。分別觀はもと分離すべからざるものを强いて分別して考察するが故に理解し難き所あれども、不離看は或は本體を主として或は現象を主として考察するものなれば、分別觀に比すれば理解し易き所あり。但本體を主として觀ることは或は理解し難き所なきにあらず。故に朱子の理一元論を誤解するもの亦少からざるが如し。而して此の不離看も亦之を分つて二と爲すを得べし。

卽ち一は本體を主として觀るものにして、一は現象を主として觀るもの是れなり。蓋し理氣なるものは本體上より見ても本來分別し得るものにあらず。又現象上より見ても本來分別し得るものにあらざるを以て、或は本體そのまゝに觀或は現象そのまゝに觀ざるべからず。此の如く理と氣とを不離看より考察すれば、太極なる理と現象なる氣とはもと相離るべからざるものなるを以て、現象あれば必ず本體あり、本體あれば必ず現象あり。理を外にしたる氣又は氣を外にしたる理の如きは到底考へ得べからざ所なり。故に朱子は

天下未レ有二無レ理之氣一。亦未レ有二無レ氣之理一。氣以成レ形。而理亦賦焉。。（朱子語類卷一、二頁）

才說二太極一。便帶二着陰陽一。才說レ性。便着二帶氣一。不レ帶二着陰陽與レ氣。太極與レ性。那裏收附。（同上卷九十四、七頁）

と云ひ、又「理未三嘗離二乎氣一。」とも、又「理是氣之理。氣是理之氣。理外無レ氣。氣外無レ理。」とも云へり。此れに據れば理氣の二者は俱存して分離すべからざること明かなり。故に朱子は門人の「太極動而生レ陽。靜而生レ陰。見二得理先而氣後一。」と問へるに答へて「雖二是如レ此。然亦不レ須二如レ此理會一。二者有則皆有。」と云へり。

（甲）本體的考察　更に本體の上より觀るときは只太極なる理の一原理の存するのみにして他に何物も存することなし。卽ち太極を主として云へば太極は陰陽たる所以の理なれば、陰陽はその中に

包涵せられて太極以外に陰陽なるものなく、又太極は動靜する所以の理なれば動靜はその中に包涵せられて太極以外に動靜なるものあるなし。若し太極なる理の存在することなくんば、一切の現象を見るを得べからざれば、太極と現象、理と氣とは二にして一、一にして二と謂はざるべからず。是れ朱子が「蓋謂三太極函二陰陽一則可。以二本體一言也。」と云へる所以なり。朱子は更に左の如く云へり。

自二太極一至二萬物化生一。只是一箇道理包括。非二是先有レ此而彼有レ彼。但統是一箇大源。由レ體而達レ用。從レ微而至レ著耳。（同上卷九十四、八頁）

太極自是涵二動靜之理一。却不レ可下以二動靜一分中體用上。蓋靜卽太極之體也。動卽太極之用也。譬如二扇子一。只是一箇扇子。動搖便是用。放下便是體。才放下時。便只是這一箇道理。及二動搖時一。亦只是這一箇道理。（同上卷九十四、八頁）

然れば不離の關係を以て云へば理は氣を離れず氣は理を離れざるものなれども、太極を主とすれば宇宙には一箇の太極なる理の存在するのみにして陰陽もなく動靜もなし。然れども陰陽となり動靜となりて顯現すべき理あるを以て、太極は陰陽動靜を包容するものと謂ふを得べきなり。故に朱子が「只是一箇道理包括。」と云ひ、「太極自是涵二動靜之理一。」と云へるは此の理を說けるなり。此の點より云へば朱子の說は具象的理一元論と謂ふを得べし。卽ち理の外に陰陽動靜なく、陰陽動靜は

悉くその中に包涵せられて一も遺す所なく、而も未だ現象となりて顯現せざる無形無象の本體なるが故なり。更に云へば萬象森然として已に具はりながら、沖漠無朕にして萬象の見るべきものなきを以てなり。

又陰陽生成の上より云へば動靜陰陽は太極なる理より生ずるものにして、太極を離れて陰陽動靜ある事なし。更に云へば陰陽動靜はもと太極なる理の中に具はれるものゝ顯現したるものなれば、太極を外にして別に陰陽動靜なるものなしと謂ふを得べし。朱子此の理を說いて以爲らく

太極動而生レ陽。靜而生レ陰。不二是動後方生レ陽。蓋纔動便屬レ陽。靜便屬レ陰。動而生レ陽。其初本此靜。靜之上又須レ動矣。所レ謂動靜無レ端。今且自二動而生レ陽處一看去。（朱子語類卷九十四、九頁）

太極理也。動靜氣也。氣行則理亦行。二者常相依。而未二嘗相離一也。當初元無二一物一。只有二此理一。有二此理一。便會二動而生レ陽。靜而生レ陰。靜極復動。動極復靜。循環流轉。其實理無レ窮。氣亦與レ之無レ窮。自レ有二天地一。便是這物事在二這裏一流轉。一日有二一日之運一。一月有二一月之運一。一歲有二一歲之運一。只是這箇物事滾將去。（朱子全書卷四十九、十頁）

此れに據れば、太極は陰陽動靜する所以の根本原理にして陰陽動靜そのものにあらず。故に陰陽動靜を以て言ふべからずと雖も、陰陽動靜たるべきものを包容するを以て、能く動いて陽となり靜にして陰となりて現はれ來るを得べし。然れば氣の動靜は卽ち動靜すべき所以の理より發したるもの

にして、理に動靜あり故に氣に動靜ありと謂ふを得べし。然れども理に動靜ありとは、動靜する所以の理あるを云へるものにして、動靜の現象ありと云ふにあらず。此れを以て之を觀れば理と氣とはもと分離すべからざるものにして、同一體として存在するものなりと謂ふを得べし。朱子が

問太極理也。理如何動靜。有レ形則有二動靜一。太極無レ形。恐不レ可下以二動靜一言上。曰。理有二動靜一。故氣有二動靜一。若理無二動靜一。則氣何自而有二動靜一乎。（朱子全書卷四十九、十四頁）

動而生レ陰。靜而生レ陽。動卽太極之動。靜卽太極之靜。動而後生レ陽。靜而後生レ陰。生二此陰陽之氣一。謂二之動而生靜而生一。則有二漸次一也。（朱子語類卷九十四、三頁）

問此理在二天地間一。則爲二陰陽一。而生二五行一。以化二生萬物一。在レ人則爲二動靜一。而生二五常一。以應二萬事一。曰。動則此理行。此動中之太極也。靜則此理存。此靜中之太極也。（同上卷九十四、八頁）

と云へるは卽ち此の理を說けるなり。故に朱子の所謂不離看は前章所以然の理の條に於て說けるものと同一にして唯所以然の理は陰陽動靜の由りて現はるゝ根本原理の存在を明かにし、不離看は所以然の理なる根本原理と陰陽動靜なる現象の氣との關係を明かにするに在り。

（乙）現象的考察　更に理氣の關係を現象上より見れば、宇宙の現象は理を包涵するものにして氣を離れて理を認むるを得べからず。蓋し太極を主とすれば理の外に氣なしと謂ふを得べく、陰陽を主とすれば氣の外に理なしと謂ふを得べし。前の部分の理に於て引きたる「太極非二是別爲二一物一。

卽二陰陽一而在二陰陽一。卽二五行一而在二五行一。卽二萬物一而在二萬物一。只是一箇理而已。」は一面より見れば太極は部分の理として存すれども、一面より見れば太極なる理と陰陽五行及び萬物なる現象と同一となりて存して相離れざるの意味あるを認取するを得べし。朱子此の理を說いて以爲らく、

若論二其生一則俱生。太極依レ舊在二陰陽裏一。但言二其次序一。須下有二這實理一。方始有中陰陽上也。其理則一。雖レ然自二見在事物一而觀レ之。陰陽函二太極一。推二其本一則太極生二陰陽一。（朱子語類卷七十五、十七頁）

性猶二太極一也。心猶二陰陽一也。太極只在二陰陽之中一。非三能離二陰陽一也。然至レ論二太極一。則太極自是太極。陰陽自是陰陽。惟性與レ心亦然。所謂一而二。二而一也。（朱子全書卷四十九、十六頁）

此れに由りて之を觀れば、陰陽を主として觀るときは、太極は陰陽動靜の中に存して陰陽動靜を離れて存するものにあらず。故に現象卽實在にして太極なる實在は現象なる氣以外に超然たるものと謂ふべからず。而して此の關係は元亨利貞の理と氣との關係の間にも認むるを得べし。蓋し元亨利貞の理も氣を通じて始めて現はるゝものにして、氣の始となり通となり遂成となりて動靜する處に於て認むるを得べきなり。故に此に在りても氣の理を離れず理の氣を離れざるを見るべし。朱子曰く、

以レ氣言。則春夏秋冬。以レ德言。利元亨利貞。在レ人則爲二仁義禮智一。元亨利貞。理也有二只四段一。氣又有二只四段一。理便在二氣中一。兩箇不二曾相離一。若レ是說時。則有下那未レ涉二於氣一底四德上。要

就氣上看也得。（朱子語類卷六十八、七頁）

然るに理は氣を離れず氣は理を離れず、理と氣と同一體となりて存在すと云ふも、理と氣と同一物なりと云ふ意味にあらずして、只理と氣との分別すべからざるを云へるものなれば、理の體にして氣の用なる關係は沒すべからず。若し理と氣との間に體用關係を認めずして、理は卽ち氣なり氣は卽ち理なりと云はば、是れ全く所謂惡平等にして渾淪無差別となるべし。是れ朱子の本旨にあらざるなり。而して理氣は此の如く分離すべからざるものなりと雖も、その體用の關係より云へば理は氣の主宰にして氣の能く活動するを得るは理の然らしむるものなれば、主從の關係あるを認めざるべからず。朱子が

所謂主宰者。理卽是理也。不是心外別有箇理。理外別有箇心。（同上卷一、二頁）

問。動靜是氣也。有此理爲氣之主。氣便能如此否。曰是也。既有理便有氣。既有氣則理又在乎氣之中。（同上卷九十四、十頁）

と云へる所を見れば、理が氣の主宰となりて活動せしむるものなること明かにして、理氣同一物とは謂ふべからず。故にその門人陳北溪も「天所以萬古常運。地所以萬古常存。人物所以萬古生々不息。不是各各自恁地。都是此理在中爲之主宰。便自然如此。就其爲天地萬物主宰處論。恁地渾淪極至。故以太極名之。」（字義詳講卷下、十二頁）と云へり。此れに由り之を觀れば、朱

子の說は獨り本體上より見て理一元論たるのみならず、現象上より見ても理一元論と謂はざるべからず。且此の不離觀は前に述べたるかの統體の理及び各具の理の說に似たる所あり。即ち上文の本體的考察は統體の理の說に當り現象的考察は各具の理の說に當るべし。然るに統體の理及び各具の理は氣を雜へざるにあらざるも、主として太極なる理を全體と部分とに分ちて朱子の意の在る所を明かにしたるものなれども、此の不離看は主として太極なる理と陰陽動靜なる氣との關係を明かにしたるものなれば、その間自ら相異なる所ありて同一視すべきものにあらざるなり。

太極なる理は一面に於ては此の如く宇宙の現象なる陰陽動靜の氣と分離すべからざること上來述べ來れるが如し。然るに一面より見れば第九節に於て述べたる現象の理とも分離すべからざる關係を有せり。蓋し宇宙の根本原理たる太極の中には所當然の理も必然の理も自然の理も包涵せらるゝものにして、現象世界に存する當然の理も必然の理自然の理も皆所以然の理なる太極より顯現したるものなれば、その間の關係の分離すべからざること理と氣との關係に於けるが如し。此の關係は朱子の是認せられたる陳北溪の說に由りて之を知るを得べし。その言に曰く、之を

如二動靜一者氣也。其所二以能動靜一者理也。（即能然之理）動則必靜。靜必復動。其必動必靜者亦理也。（即必然之理）事至則當レ動。事過則當レ靜。其當レ動當レ靜者亦理也。（即當然之理）而其所二以一動一靜一。又莫レ非二天理之自然一矣。（即所以然之理又自然之理）（陳北溪全集卷二、十二頁）

此れに據れば、太極なる所以然の理(又自然の理)の發して當然の理必然の理自然感應の理となるを見るべく、而して此の現象の理と現象の氣とも相離るべからざることを見るべし。此の點より見れば理一元二面論と謂ふべからざるに非らず。

太極(即理)〈現象の氣(陰陽動靜の氣)
　　現象の理(當然必然自然の理)〉

之を要するに理氣の關係は不雜の看より考察すると不離の看より考察するとによりて或は理氣二物となり、或は理氣同在となり、更に之を分てば不雜看より見れば理氣對立、理先氣後となり、又不離看より見れば本體的考察、現象的考察となるべし。然るに此れはもと吾人の思考によりて分類したるものにして事實を分類したるにあらず。故に吾人の思考認識よりすれば理氣同在と見るも眞理にして理氣二物と見るも亦眞理なり。而して理氣を分別して二物と爲すも、もと吾人の觀念上に於ける問題にして、理氣の間には體用の關係あれば、朱子の說を以て理氣二元論と謂ふべからず。朱子はたとひ理氣を分別して二物と爲すと雖も、理氣體用の關係を否定したるものにあらずして、理を以と體と爲し主宰と爲し、陰陽動靜を涵み陰陽動靜を生ずる根本原理と爲すものなれば理一元論と謂はざるべからず。然るに宇宙の全體の理より見れば吾人は部分の理を得たるに過ぎず。此の如きものを以て能く宇宙全體の理を知るべきや否やと云ふに。惟ふに吾人は部分の實在たるに過ぎざ

れども、部分の中に全體の理を含める部分なるを以て、部分の吾人の中にも全體の理あり。故に部分の吾人と雖も宇宙全體の理を悟り得べからざるにあらず。此れに由りて之を觀れば、部分の理なる朱子が宇宙全體の理を考察せられたるもの卽ち眞理なりと認むるを得べし。